鳥栖市文化財調査報告書第 96 集

門戸口遺跡

市庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

２０２１
鳥栖市教育委員会

序

鳥栖市は、脊振山地東端部の九千部山を最高峰としてなだらかに傾斜し、筑後川に面した自然豊かな内陸都市であります。また、三国が交差するその立地から古くから交通の要衝地として発展してしており、貴重な文化財がたくさん発見されています。

今回の調査は鳥栖市役所新庁舎建設に伴う発掘調査であります。本遺跡は養父郡家および古代官道の推定地の間に立地しており、今回の調査でも関連する集落跡を確認しています。本書を通じて、地域の文化財に対するさらなる理解につながり、学術文化の向上に寄与するものであれば幸いに存じます。

最後になりましたが、文化財保護にご理解とご協力をいただきました市民の皆様、そして発掘調査・報告書作成に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

令和３年３月３１日

鳥栖市教育委員会

教育長　　天野　昌明

例言

1．本書は、市庁舎建設に伴い実施した、鳥栖市宿町に所在する門戸口遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は令和元年 10 月８日～令和２年２月 28 日、整理作業は令和２年４月１日～令和３年３月 31 日に鳥栖市教育委員会が実施した。
3．遺構実測・写真撮影は岡田晴菜・藤岡怜史が行い、一部作業員が補助した。
4．出土遺物の整理を含む報告書作成業務は、鳥栖市牛原町文化財整理室で行った。
遺物の整理･実測･トレースは松崎友子･楢崎孝子･毛利よし子･加藤美砂･中島みちこが行い、遺物の写真撮影、本書の執筆・編集は岡田が行った。

凡例

1．遺構の略号は、門戸口遺跡（ＴＭＧ）である。遺構の略号は SH：住居跡、SK：土坑、SB：掘立柱建物跡、SA：柵列である。
3．遺構実測図に用いた方位は、座標北（世界測地系第Ⅱ系による）である。
4．測定値の表示に用いた単位は遺構：m、遺物：㎝である。
5．遺構・遺物写真、遺構・遺物実測図、遺物（登録番号：200101 ～ 200286）は鳥栖市牛原町文化整理室に保管する。

本文目次

第Ⅰ章　調査の概要
1．調査に至る経緯…… 1
2．調査の組織…… 1
第Ⅱ章　地理的環境・歴史的環境
1．地理的環境…… 2
2．歴史的環境…… 2
第Ⅲ章　調査の内容
1．遺跡の概要…… 4
2．遺構と遺物…… 4
第Ⅳ章　まとめ
1．土製権について…… 40
2．刻書紡錘車について…… 40
3．門戸口遺跡の性格…… 41

挿図目次

第１図　門戸口遺跡　周辺遺跡地図（Ｓ =1/12,000)
第２図　門戸口遺跡　遺構配置図（Ｓ =1/400）
第３図　門戸口遺跡　SH ３・４実測図（Ｓ =1/60）
第４図　門戸口遺跡　SH ３・４出土土器（Ｓ =1/3）
第５図　門戸口遺跡　SH ５実測図（Ｓ =1/60）
・出土土器（Ｓ =1/3）
第６図　門戸口遺跡　SH ９・13 実測図（Ｓ =1/60）
・出土土器（Ｓ =1/3）
第７図　門戸口遺跡　SH21 実測図（Ｓ =1/60）
出土土器（Ｓ =1/3）
第８図　門戸口遺跡　SH24 実測図（Ｓ =1/60）
・出土土器（Ｓ =1/3）
第９図　門戸口遺跡　SH22・25・27 実測図
（Ｓ =1/60）・SH22 出土石器（Ｓ =1/2 ）
第 10 図　門戸口遺跡　SH ８・26 実測図（Ｓ =1/60）
出土土器（Ｓ =1/3）
第 11 図　門戸口遺跡　SH28・33 実測図（Ｓ =1/60）
第 12 図　門戸口遺跡　SK １実測図（Ｓ =1/60）
第 13 図　門戸口遺跡　SK １出土土器①（Ｓ =1/3）
第 14 図　門戸口遺跡　SK １出土土器②（Ｓ =1/3）
第 15 図　門戸口遺跡　SK １出土土器③（Ｓ =1/3）
第 16 図　門戸口遺跡　SK １出土土器④（Ｓ =1/3）
第 17 図　門戸口遺跡　SK １出土土器⑤（Ｓ =1/3）
第 18 図　門戸口遺跡　SK １出土土器⑥（Ｓ =1/3・1/2）
・出土石器（Ｓ =1/2）
第 19 図　門戸口遺跡　SK2 実測図（Ｓ =1/40）
第 20 図　門戸口遺跡　SK ２出土土器（Ｓ =1/3）
第 21 図　門戸口遺跡　SK ６・７・10 実測図
（Ｓ =1/30）
第 22 図　門戸口遺跡　SK11 実測図（Ｓ =1/30）
SK10・11 出土土器（Ｓ =1/3）
第 23 図　門戸口遺跡　SK14・15 実測図（Ｓ =1/40）
・SK15 出土土器（Ｓ =1/3）
第 24 図　門戸口遺跡Ｓ　K16・17・23 実測図
（Ｓ =1/30）・SK17 出土土器（Ｓ =1/3）
第 25 図　門戸口遺跡　SK18・20・29 実測図
（Ｓ =1/40）・SK20・29 出土土器（Ｓ =1/3）
第 26 図　門戸口遺跡　SK32 実測図（Ｓ =1/30）
出土土器（Ｓ =1/3）
第 27 図　門戸口遺跡　SK34 実測図（Ｓ =1/30）
・出土土器（Ｓ =1/3）
第 28 図　門戸口遺跡　SH36 ～ 38 実測図（Ｓ =1/80）
第 29 図　門戸口遺跡　SH39・40・SA41 実測図
（Ｓ =1/80）
第 30 図　門戸口遺跡　出土土器（Ｓ =1/3）
第 31 図　門戸口遺跡　出土鉄器（Ｓ =1/2）

表目次

表１　門戸口遺跡出土土器観察表
表２　門戸口遺跡出土石器・鉄器観察表

写真図版目次

図版１　市役所周辺俯瞰（南から）
昭和 24 年米軍撮影空中写真
図版２　門戸口遺跡遠景（東から）
SK １出土土製品
図版３　SH ３（東から）
SH ４完掘（北東から）
SH ５完掘（北東から）
SH ９完掘（北東から）
SH21 完掘（北東から）
SH22 完掘（北東から）
SH24 完掘（北東から）
SH25 完掘（北東から）
図版４　SH26 完掘（南東から）
SH27 完掘（南西から）
SH28 完掘（南東から）
SH33 完掘（北東から）
SK １土器出土状況（西から）
SK １土製品出土状況（南から）
SK １完掘（北から）
SK ２完掘（南東から）

図版５　SK ６完掘（東から）
SK ７完掘（西から）
SK10 完掘（南西から）
SK11 完掘（西から）
SK14 完掘（北から）
SK15 完掘（北西から）
SK16 完掘（南から）
SK17 完掘（南西から）

図版６　SK18（南西から）
SK19 完掘（北西から）
SK20 完掘（南西から）
SK23 完掘（北東から）
SK29 完掘（北西から）
SK30 完掘（南東から）
SK34 完掘（北東から）
SB35 完掘（北東から）

図版７　SB36 完掘（北東から）
SB37・38 完掘（北東から）
SB39 完掘（南西から）
SB40 完掘（北東から）
出土土器：1 ～ 10

図版８　出土土器：11 ～ 13、15 ～ 17、19・20・23・24・27・28

図版９　出土土器：29 ～ 39・40

図版 10　出土土器：40・42 ～ 51

図版 11　出土土器 52 ～ 63・65 ～ 67

図版 12　出土土器 68 ～ 82

図版 13　出土土器：83 ～ 87・89・91 ～ 99

図版 14　出土土器：100 ～ 113・115 ～ 117

図版 15　出土土器：119 ～ 134

図版 16　出土土器：135・137 ～ 141・143 ～ 148・150

図版 17　出土土器：151 ～ 164・166

図版 18　出土土器：167 ～ 174・176 ～ 186

第Ⅰ章　調査の概要

１．調査に至る経緯

調査対象地である鳥栖市宿町 1118 番地（鳥栖市役所グラウンド）において新庁舎建設の計画が決まったため、平成 30 年 4 月 11 日付けで埋蔵文化財の有無および取扱いについて照会があった。平成 30 年６月４・７日・７月２・４日に確認調査を実施したところ、調査対象地の北東側を中心に土坑及び小穴を確認し本調査が必要となった。そのため、令和元年９月２日付けで鳥栖市長橋本康志より文化財保護法第９４条第１項に基づく届出が提出されている。調査結果をもとに、庁舎建設課と協議の結果、建設時、遺構に影響する範囲である約 2500㎡を調査範囲とすることした。

２．調査の組織

発掘調査は鳥栖市教育委員会が主体となって実施している。調査組織は以下のとおりである。

調査体制	鳥栖市教育委員会
教育長	天野昌明
教育次長	白水隆弘（～令和２年 10 月）
教育部長	白水隆弘（令和２年 11 月～）
教育部次長	青木博美（令和２年 11 月～）
生涯学習課課長	松隈義和
生涯学習課参事	竹下　徹
生涯学習課課長補佐	八尋茂子
文化財係	
係長	久山高史
主査	湯浅満暢（事前審査・確認調査担当）
	島　孝寿
	内野武史
主任	龍　孝明
	岡田晴菜（本調査・整理作業担当）
主事	藤岡怜史（本調査担当）

調査協力

鳥栖市庁舎建設課

佐賀県文化課文化財保護室

発掘作業員	秋好忠義	江藤芳雄	緒方幸弘	皆良田憲男	皆良田涼子	刈間節次
	篠原英雄	杉岡俊昭	樋口泰三	本田　洋	山口正樹	小森三夫
	古賀哲也	高尾喜則	豊増幸男	松崎友子	楢崎孝子	毛利よし子
整理作業員	松崎友子	楢崎孝子	毛利よし子	加藤美砂	中島みち子	

第 II 章　地理的環境・歴史的環境

１．地理的環境

鳥栖市は佐賀県東端部に位置し、市の北部には東西に走る脊振山地、九千部山を最高峰に南東に向かって傾斜し、山麓部が市域の北西部分を覆っている。脊振山麓からは東から秋光川・大木川・安良川・沼川といった河川が筑後川に注いでいて、これらの河川により形成された扇状地と蛇行河川沿いに発達した自然堤防や低位から高位の３段階の丘陵が広がりを見せている。

古くから肥前・筑前・筑後の三国境であり、現在では北は福岡県那珂川市、東は福岡県小郡市、南は福岡県久留米市に接して県境となっている。また、市内には JR 鹿児島本線、久大本線および九州新幹線といった鉄道や九州縦貫道・横断道等の幹線道路が走っており交通の要衝地である。

２．歴史的環境

市内では旧石器時代から近世まであわせて 189 の遺跡が確認されている。

旧石器時代は市内各地で遺物が採集されるのみで関連遺構は確認できていない。縄文時代の遺跡は山麓部に多くみられる。早期の集落関連遺跡である西田遺跡から集石遺構や、帯状配石遺構、土壙墓、落とし穴状遺構が確認されており、出土土器は早期の土器型式をほぼ網羅していることから、住居跡は確認されていないものの定住拠点の可能性がある遺跡といえる。中期の遺跡としては西田遺跡、蔵上遺跡があり、瀬戸内系の土器が出土していることから、瀬戸内系土器文化が市内へ広がっていることがうかがえる。後期の遺跡は蔵上遺跡で円形や隅丸方形等の住居跡を有する集落跡が確認されている。晩期に入ると遺跡数は増加し、安永田遺跡、本川原遺跡、立石惣楽遺跡等が挙げられる。

弥生時代前期は、遺跡数は少ないながらも村田三本松遺跡で前期の早い段階の墓域が確認されており、その後ほぼ同じ場所に貯蔵穴が確認されていることから集落域と墓域の境は曖昧であったことがわかる。前期末から遺跡数は増え、北部地区丘陵群（柚比遺跡群）を中心とした多くの遺跡が確認されている。さらに中期以降は遺跡の分布が広がり、丘陵上だけではなく低地にも集落を形成し、柚比丘陵以外に進出している。また中期後半から中期末には、安永田遺跡や本行遺跡のように市内の丘陵上に青銅器生産拠点が点在することが明らかになっている。後期以降は集落形成地は低位丘陵南端が中心となる。

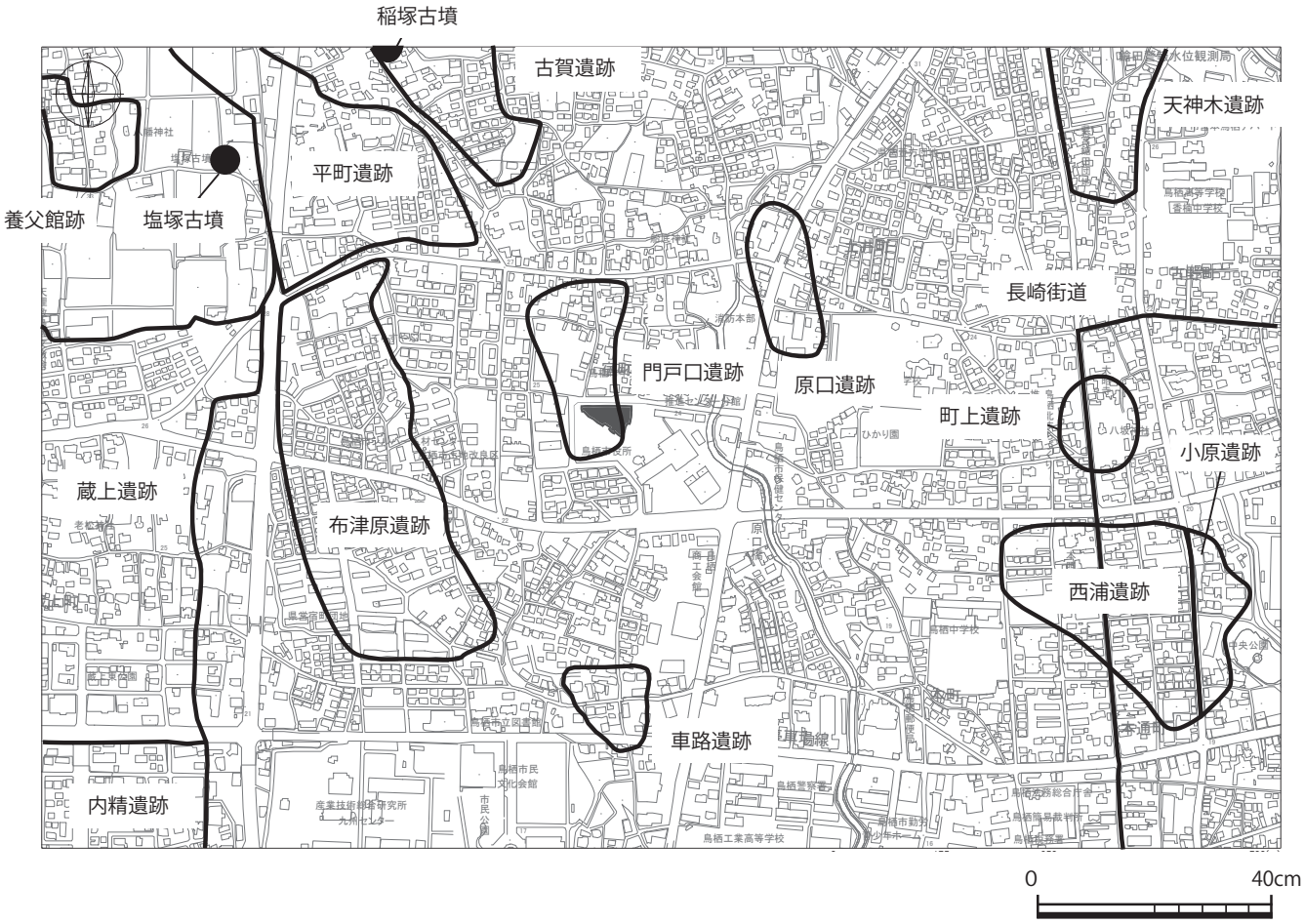
古墳時代前期は前方後方墳である赤坂古墳の築造から始まり、日岸田遺跡、今泉遺跡の方形周溝墓が確認されている。５世紀代に平原古墳、山浦古墳群、薄尾遺跡、太田東方古墳、６世紀に入ると柚比丘陵上に、前半は前方後円墳の剣塚、後半は田代太田古墳などの大規模な古墳が造られるようになり、市内における首長墓の築造は最盛期を迎える。その後、６世紀末～７世紀前半には大木川右岸域に新たな墓域が展開されるようになる。方墳の百度塚古墳の築造をもって市内の首長墓の造営は終焉を迎えることとなるが、その後も九千部山麓やそこから伸びる丘陵上、特に河内ダム周辺を中心に群集墳の築造が続き、市内で約 360 基ほど確認されている。平地に築造される群集墳もみられるが、丘陵上に造られるもののように数百基以上にのぼることがないため墓域は集落ごとに形成されているようである。人々の生活の場は、弥生時代後期にはすでに高位段丘から低位段丘にまで広がっていたが、古墳時代に入ると鉄製農工具の普及や開発技術の向上などにより弥生時代にはあまり土地利用が見られなかった扇状地や低位段丘の先端に集落が形成され、さらに広がりを見せている。

古代の鳥栖地域は肥前国に属し、大木川を挟んで東西に基肄郡と養父郡に分かれていた。基肄郡では、八ツ並金丸遺跡から大型建物を含む掘立柱建物跡や刻字を施した土器や布目瓦が出土しているため官衙関連の遺跡と推定されるが、存続期間が８世紀中頃～後半を中心とする限定的なものであることが問題となっている。また、養父郡では蔵上遺跡から多数の掘立柱建物跡が検出され、「厨番」と書かれた墨書土

器が出土したことから蔵上町の集落が郡庁を含む養父郡家の主要部であることが裏付けられている。集落遺構は基肄郡で八ツ並金丸遺跡、今町岸田遺跡、本川原遺跡、本原遺跡、養父郡では牛原前田遺跡、立石惣楽遺跡、柳の元遺跡、蔵上遺跡などで確認されている。

平安時代末期以降には基肄郡、養父郡ともに荘園が形成されはじめている。耕地の半数は荘園が占めるようになり、その多くは大宰府天満宮安楽寺領であとは宇佐八幡宮弥勒寺領であった。南北朝期から戦国期にかけて鳥栖地域も支配者の入れ替わりがみられ、戦乱期を迎える。この頃に山浦町や牛原町周辺に山城が築かれるが、その中でも勝尾城は、16 世紀代以降から島津に侵攻された天正 14 年までの約 90 年間、筑紫氏の本城として機能し、その周辺に支城や屋敷群などが構築されている。近世の鳥栖地域は養父郡の西半分は佐賀藩、東半分と基肄郡は対馬藩の２つの藩に分かれ、古くから交通の要所であった鳥栖地域に海外交易の窓口である長崎につながる長崎街道が通り、田代宿、轟木宿が整備される。

廃藩置県後は厳原県・伊万里県・三潴県・長崎県を経たのち明治 16 年に佐賀県となった。明治 21 年には市制町村制が交付されており、施行前に町村合併を実施したことを受けて明治 22 年 4 月に轟木・麓・旭・基里・田代の 5 カ村が新たに発足している。その後、轟木村に町制を施行しようとする動きが本格化し明治 40 年鳥栖町と改称され、昭和 11 年には田代町制が施行、昭和 29 年 4 月に鳥栖町・田代町・基里村・麓村・旭村の２町３村が鳥栖市となり現在に至る。



第１図　門戸口遺跡　周辺遺跡地図（Ｓ＝ 1/12,000）

第Ⅲ章　調査の内容

１．遺跡の概要

本調査区は国道 34 号線の西側に位置する。標高 23 m前後で門戸口遺跡範囲の東端部にあたる。昭和 40 年代前半の市庁舎建設の際に、水田および畑を造成しており、その後グラウンドを整備している。国道 34 号線との高低差は２m前後あり、また、表土下 0.3 ～ 0.5 mで地山を確認している。水田の床土も残存していないため、現在の庁舎建設時の造成でかなり削平を受けているようである。旧地形は北西から南東へかけて緩やかに傾斜している。

２．遺構と遺物

【竪穴建物跡】

ＳＨ３　調査区東側に位置し、主軸をＮ -85°- Wにとる。平面プランは隅丸方形、規模は長辺 3.93 m× 短辺 3.05 mとやや小ぶりで西壁に竈を設ける。直径 0.23 ～ 0.33 mの柱穴を４つ持つ４本柱の建物である。残存状況は良くないため竈および建物構造の詳細は不明である。

出土遺物　埋土中から須恵器の杯蓋が１点出土出土している。

ＳＨ４　調査区ほぼ中央に位置し、主軸をＮ -55°- Wにとる。平面プランは方形で、規模は 4.65 m× 4.43 mである。北西壁に竈を設け、直径 0.45 ～ 0.58 mの柱穴を４つ持つ４本柱の建物である。残存状況は悪く、竈の上部構造は残存しておらず被熱による赤化面が残るのみである。検出面はすでに床面であったと考えられる。

出土遺物　埋土中から須恵器４点と土師器２点が出土している。２は須恵器杯身で、立ち上がりは短く内湾しながら伸びる。３はつまみ付きの蓋で端部が内傾する。４・５は須恵器の杯であるが、４は高台付杯で５は高台が付かない。６は土師器の椀である。７は竈の東に隣接するピットの底面から出土した甑のミニチュアである。竈に関連する遺物とも考えられるが、据えた状態で出土していないことから埋没段階で落ち込んだ可能性もある。８は土師器甕の口縁部～頸部付近の破片である。

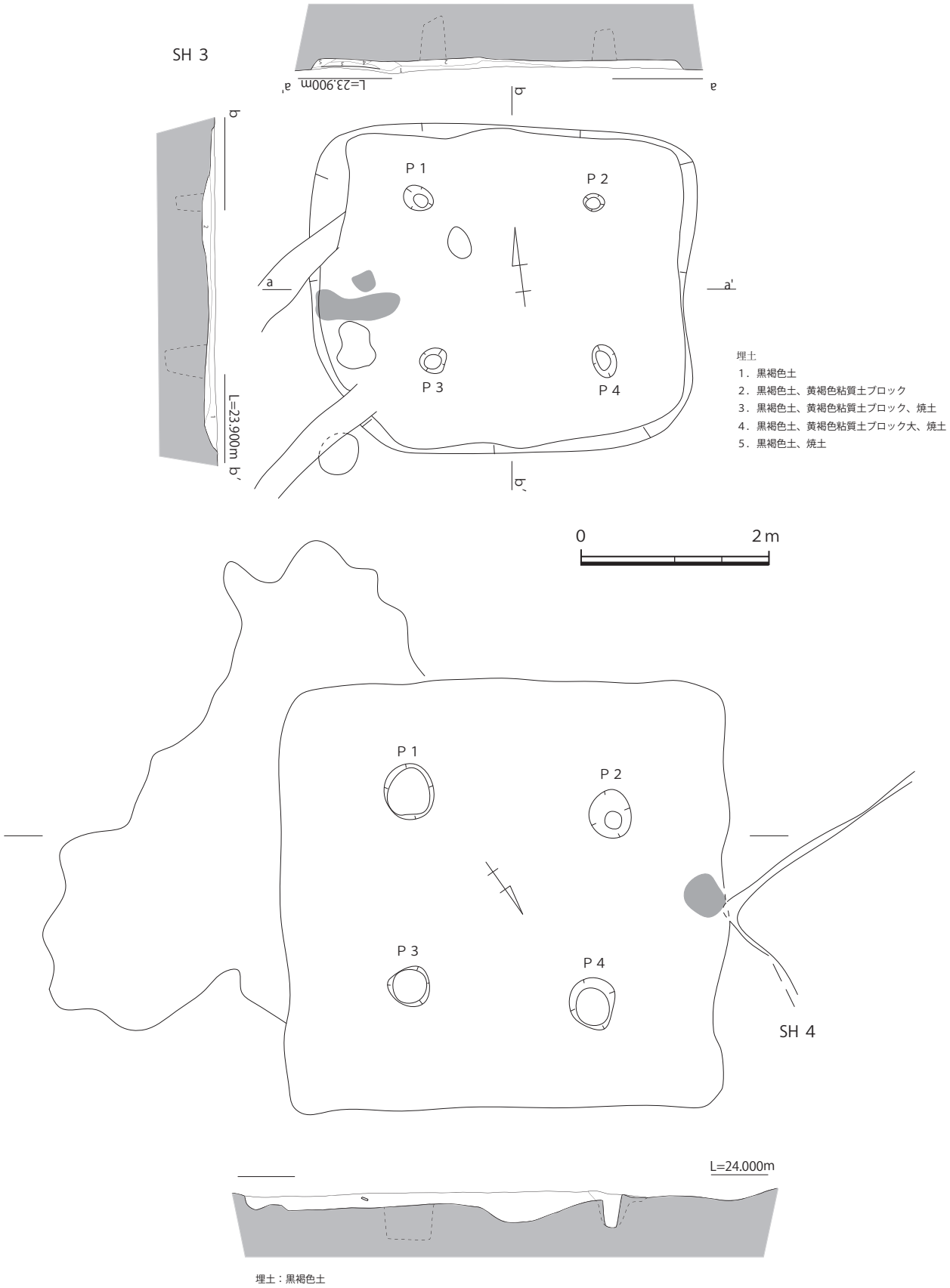
ＳＨ５　調査区中央やや南寄りに位置する。平面プランは南壁が張り出し、方形の２軒の建物が重複したような形状であるが明確な切り合いは確認できなかった。規模は長辺 5.95 m、短辺 4.50 mである。西壁側が 15cm 程度下がるがこれが建物の切り合いのためか、構造に由来するものかは不明である。建物の柱穴としたのはＰ１とＰ２の２本で、他は建物に伴うものかどうかは判然としない。

出土遺物　埋土中から須恵器５点、土師器２点が出土している。9 は須恵器の杯身、10 は杯蓋である。11 は長頸壺の口縁部である。12 は回転ナデ仕上げ、湯呑のような形状の椀である。13 は杯蓋である。回転ナデ仕上げであるが、天井部分に向かって強いナデが施され天井部との境目に段差がついている。ヘラ記号がみられる。14 は土師器の小椀、15 は頸部が緩やかに屈曲する甕の口縁部～肩部にかけての破片である。

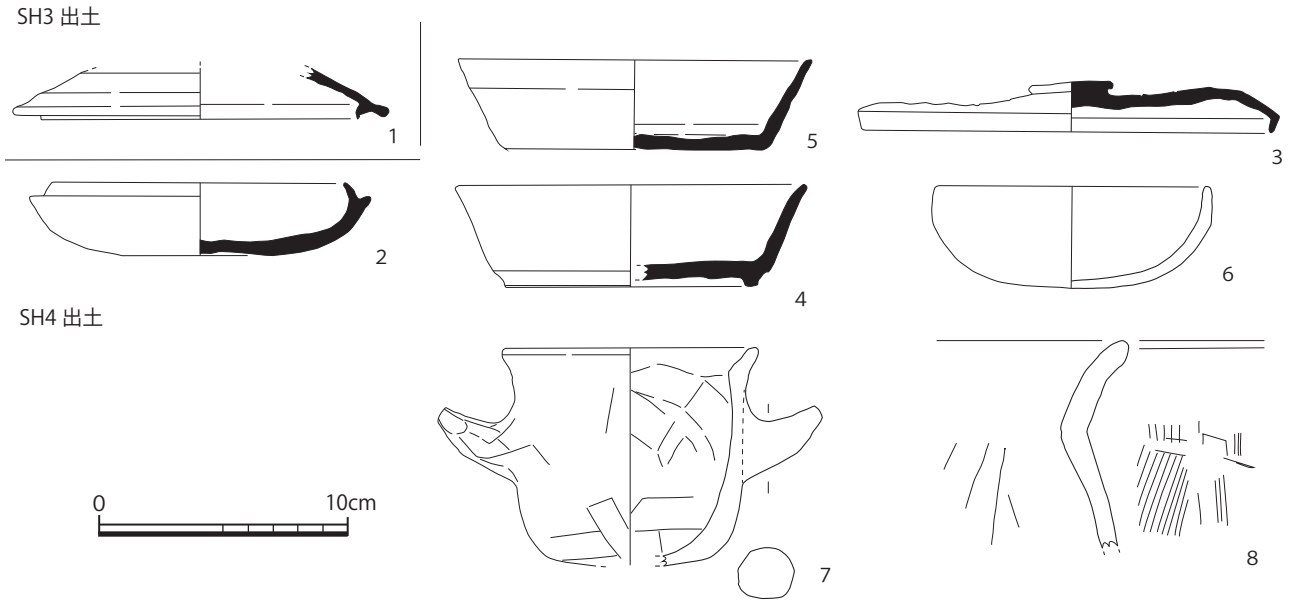
ＳＨ８・26　調査区中央南端に位置する平面プラン方形の建物２軒が切り合っている。先後関係はＳＨ 26→ＳＨ８である。それぞれ平面プランは方形で、ＳＨ規模はＳＨ８が3.6 m以上× 3.7 m、ＳＨ 26 は 3.70 m× 3.23 mを測る。ＳＨ 26 内には土坑が２基存在している。Ｐ１・Ｐ５・Ｐ６がＳＨ８の柱穴、Ｐ２～Ｐ４がＳＨ 26 の柱穴であるが、Ｐ１に関しては両建物の柱穴の可能性がある。

出土遺物　埋土中から須恵器１点、土師器５点出土している。21 は須恵器椀である。ナデ仕上げで口縁部は欠損している。22 は土師器の椀の破片である。23 は工具ナデ仕上げの土師器高杯である。杯部と脚部先端が欠損している。24 ～ 26 は土師器の甕である。24・25 は口縁部～肩部にかけての屈曲は緩やかで 24 は口縁端部を折り返して形成している。26 は口縁部が緩やかに屈曲する。

第 2 図　門戸口遺跡　遺構配置図（S＝1/400）



第３図　門戸口遺跡　ＳＨ３・４実測図（Ｓ＝ 1/60）



第４図　門戸口遺跡　ＳＨ３・４出土土器（Ｓ =1/3）

ＳＨ９　調査区東端に位置する。平面プランは方形で、規模は 4.17 m× 4.05 mを測る。建物中央に深さ 0.17 mの土坑があり、直径 0.45 m～ 0.64 mの柱穴を 4 つ持つ 4 本柱の建物である。

出土遺物　埋土中から 16 の須恵器杯蓋が 1 点出土している。回転ナデ仕上げで中央部分から屈曲し調整の単位で体部の傾きは変換している。天井部にヘラ記号がみられる。

ＳＨ 13　調査区南西側に位置する。平面プランは隅丸方形で規模は 4.05m × 3.96 mである。遺構検出面ではすでに硬化した床面であり、かなりの削平を受けている。掘立柱建物と重複し、先後関係はＳＢ 37 とＳＢ 38 に切られている。

出土遺物　埋土中から 17 の須恵器杯身が 1 点出土している。下半 1 / 3 はケズリ調整である。

ＳＨ 21（①・②）　調査区南端に位置する。遺構検出面ではすでに建物の床面であったため平面プランは長方形で２軒の端同士が重複したような形状であるが先後関係は判然としない。東側の建物には住居内土坑を確認している。

出土遺物　埋土中から 18 の須恵器杯の破片が出土している。回転ナデ仕上げで口縁部にかけて器壁が薄くなり、口唇部は内側に強いナデがみられ内傾する。

ＳＨ 22　調査区東側に位置し、ＳＨ３と重複する建物である。平面プランは北壁が少し張り出した方形で規模は長辺 6.16 m×短辺 5.26 mを測る。北壁に竈を設け、直径 0.57 m～ 0.63 mの柱穴を 4 つもつ４本柱の建物である。遺構検出面ですでに床面であったため上部構造は不明である。

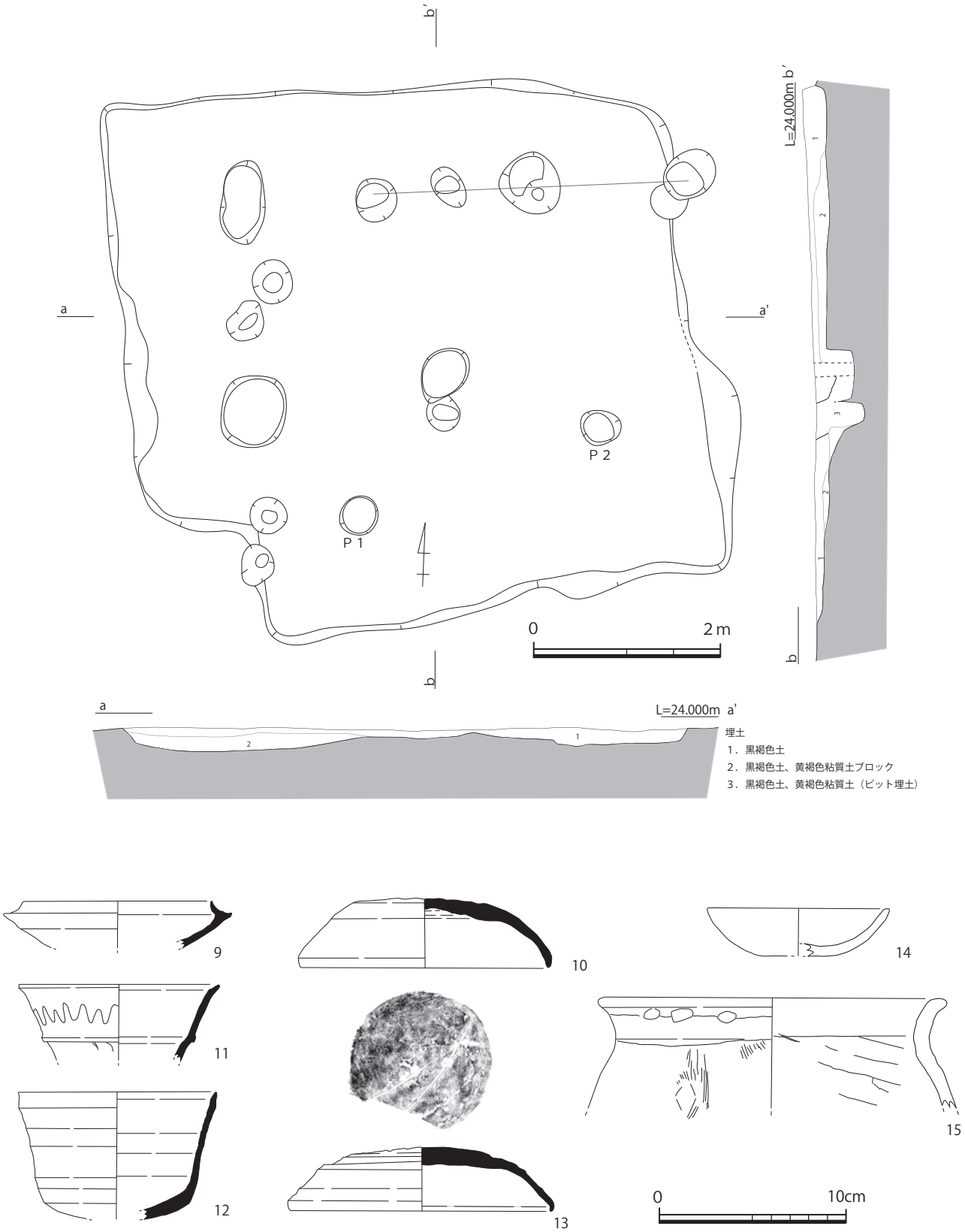
出土遺物　埋土中から 20 の紡錘車が 1 点出土している。蛇紋岩製で断面は丸みを帯びた薄台形を呈し、表側の縁は面取したあと研磨で仕上げている。刻書がみられる。「大伴目」と読めるが「目」は「さかん」もしくは「め」（人物名）か。

ＳＨ 24　調査区東側の北端に位置し主軸はＮ -10° - Wにとる。平面プランは北西角が張り出した隅丸方形で規模は 5.83 m× 5.13（5.98）mを測る。北壁に竈を設け、直径 0.35 m～ 0.55 mの柱穴を 4 つもつ４本柱の建物である。遺構検出面ですでに床面であったため上部構造は不明である。

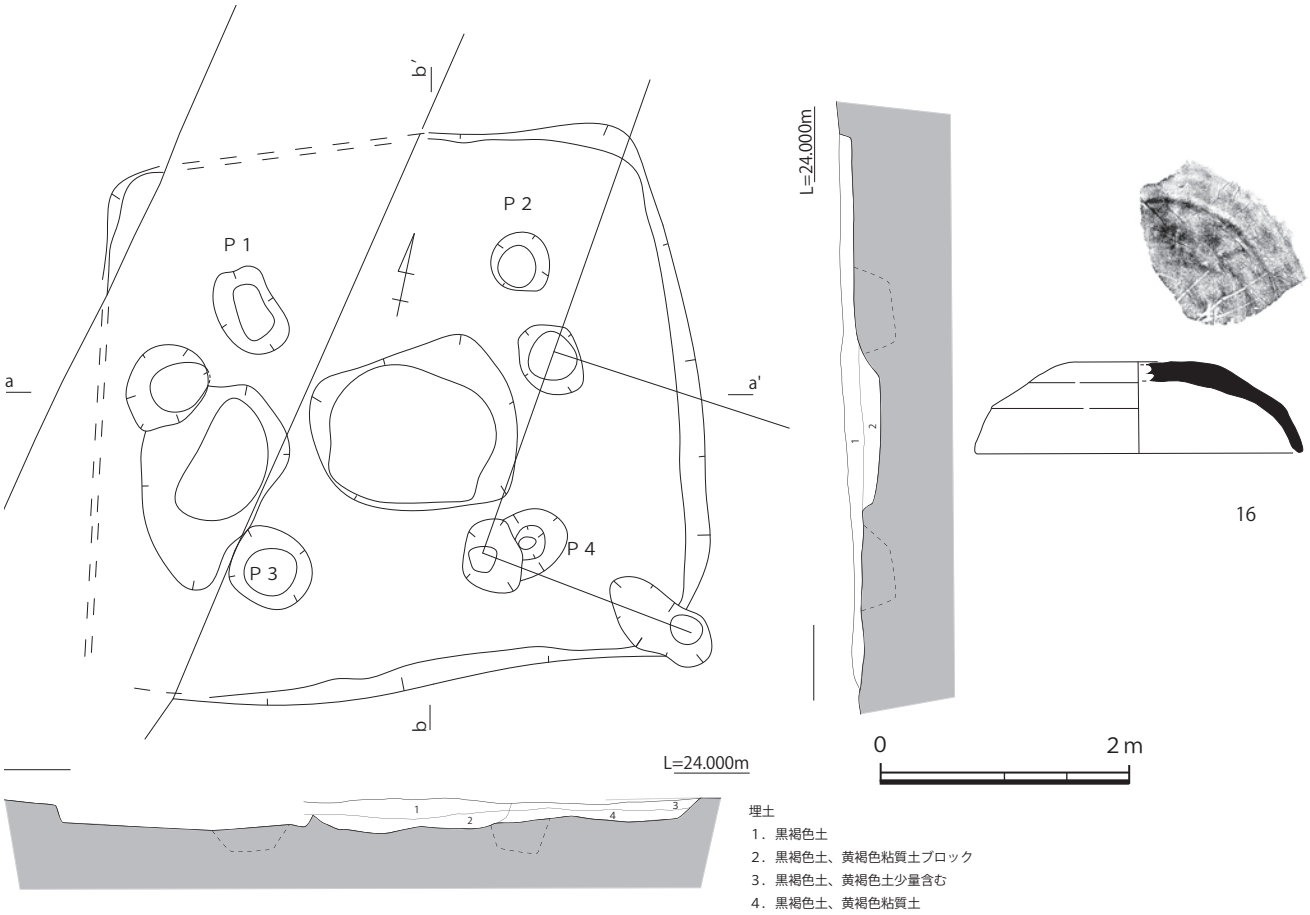
出土遺物　埋土中から 19 の須恵器杯が 1 点出土している。回転ナデ仕上げで、底面付近は丁寧に仕上げられていて変換点がはっきりしている。

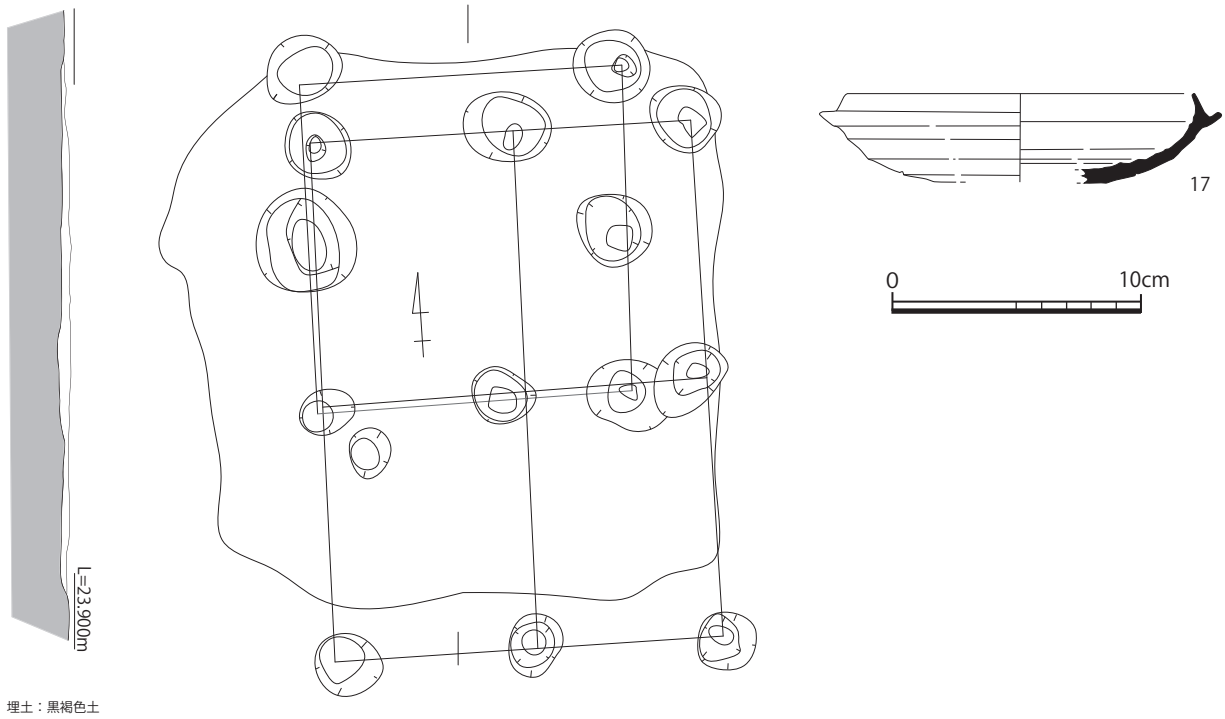
ＳＨ 25　調査区東端に位置している。平面プランは方形で、一辺が 2.50 m以上の建物である。大半は調

査区外に伸びているため内部構造は不明である。
ＳＨ 27　調査区東北端に位置している。平面プランは方形で、一辺 3.09 m以上である。大半は調査区外へ伸びているため詳細は不明である。
ＳＨ 28　ＳＨ 27 の西側に隣接する。平面プランは方形、北壁は調査区外へ伸びている。規模は 4.43 m × 3.60 m以上を測る。直径 0.33 m～ 0.57 mの柱穴を 4 つ持つ 4 本柱の建物である。遺構検出の段階ですでに床面であったため上部構造は不明。
ＳＨ 33　調査区中央よりやや北側に位置する。平面プランは不整な角丸方形で、規模は 3.46 m× 3.37 mを測る。遺構検出面ではすでに床面であり上部構造は不明であるが、南壁沿いに一部壁溝を確認している。直径 0.36 ～ 0.57 mの柱穴 4 つ持つ 4 本柱の建物である。
【土坑】
ＳＫ１　調査区東側北寄りに位置する。平面プランは不整楕円形で、規模は長軸 11.20 m、短軸 6 .72 m、一番幅が狭い所で 3.75 mを測る。掘り方は全体的に不整形で底面は凹凸がある。最深部で 0.57 mと、ピットを除き全体的に残存状況が良くない中で深さがあり、1 から 3 層で古墳時代から古代までの遺物が出土していて、本調査区の中で最も出土量の多い遺構である。遺物の出土状況は北側に集中し、底面付近に近づくにつれ遺物量は減少傾向にある。
出土遺物　ＳＫ 1 からは破片を含め多くの須恵器と土師器、鉄器類が出土している。27 ～ 29・31・32 は須恵器小椀である。いずれも回転ナデ仕上げで 29 と 31 の底面にはヘラ記号がみられる。30・33 ～ 37 は須恵器杯蓋である。30 の口縁部は強いナデにより外反し、段がついている。33 は口唇部内側をナデにより斜めに仕上げる。34 はつまみを有する蓋で、つまみの形状は先端が尖った宝珠形をしている。天井部はヘラケズリ仕上げ、受部はやや長く内側に入る。つまみの付け根から端部に向かってヘラ記号がみられる。35 は外面に付着物がみられる小型の杯蓋である。36 は器高が低く、つまみのない杯蓋で中段より上はヘラケズリ仕上げである。37 は土師質の蓋である。つまみは高さを持つ釦形で中央がややへこんでいる。口唇部は平らに仕上げている。38 ～ 47 は須恵器杯身である。38 は回転ナデ仕上げで、底面付近に丸みをもちヘラ記号がみられる。立ち上がりはやや長く内傾気味に立ち上がる。39・40 は受部が内傾しながら立ち上がり、器高は低く底面は平担である。40 は底面にヘラ記号がみられる。41 立ち上がりはやや長く内傾し伸びる。42 は器高は低く、受部が短く内傾する。43 は器高が低く、立ち上がりは短く内傾する。44 は立ち上がりは薄く仕上げられ、長く湾曲しながら立ち上がる。底面にヘラ記号がみられる。45 は器高が低く、立ち上がりは短く内傾する。底面は平らでヘラ記号がみられる。46 立ち上がりがやや短いが内側に湾曲しながら立ち上がる。下半 1/ 3 はヘラケズリである。47 は立ち上がりの器壁は薄く、やや短い。48 は高杯である。杯部分の立ち上がりは長く、内傾する。脚裾部は逆「へ」の字状で端部が上向いている。49 ～ 63 は須恵器蓋である。49 は天井部にかけてやや丸みもち、調整はヘラケズリである。つまみ高は低く中央はへこんでいる。口縁端部断面は三角形をなす。50 はつまみ高が高く、先端は尖る。全体回転ナデ仕上げで、口縁端部は三角形である。51 はつまみ高が低く中央はややへこむ。天井部はヘラケズリで口縁端部断面は三角形をなしている。52 は蓋の破片であるためつまみの有無は不明。口縁端部は三角形である。53 は口縁部にかけて丸みを持つつまみ付きの蓋である。端部は折り曲げたように内傾している。つまみは欠損しているため形状は不明である。54 は蓋の破片である。つまみの有無は不明。口縁端部は折曲げたように内傾する。55 ～ 58 は蓋の破片でつまみの有無は不明である。55 は回転ナデ仕上げで、つまみの有無は不明である。端部は内側に入らずそのまま断面形は三角形をなしている。56 の口縁段部は折り曲げた後ナデ成形されている。57 は口縁端部断面は三角形をなす。58 は歪みのため天井部中央は大きくへこんでいる。口縁端部断面は三角形をなす。59 はつまみの付く蓋である。口縁部は肩から端部にかけて屈曲は緩やかで、端部は丸い。60 は端部を折り曲げた蓋である。中

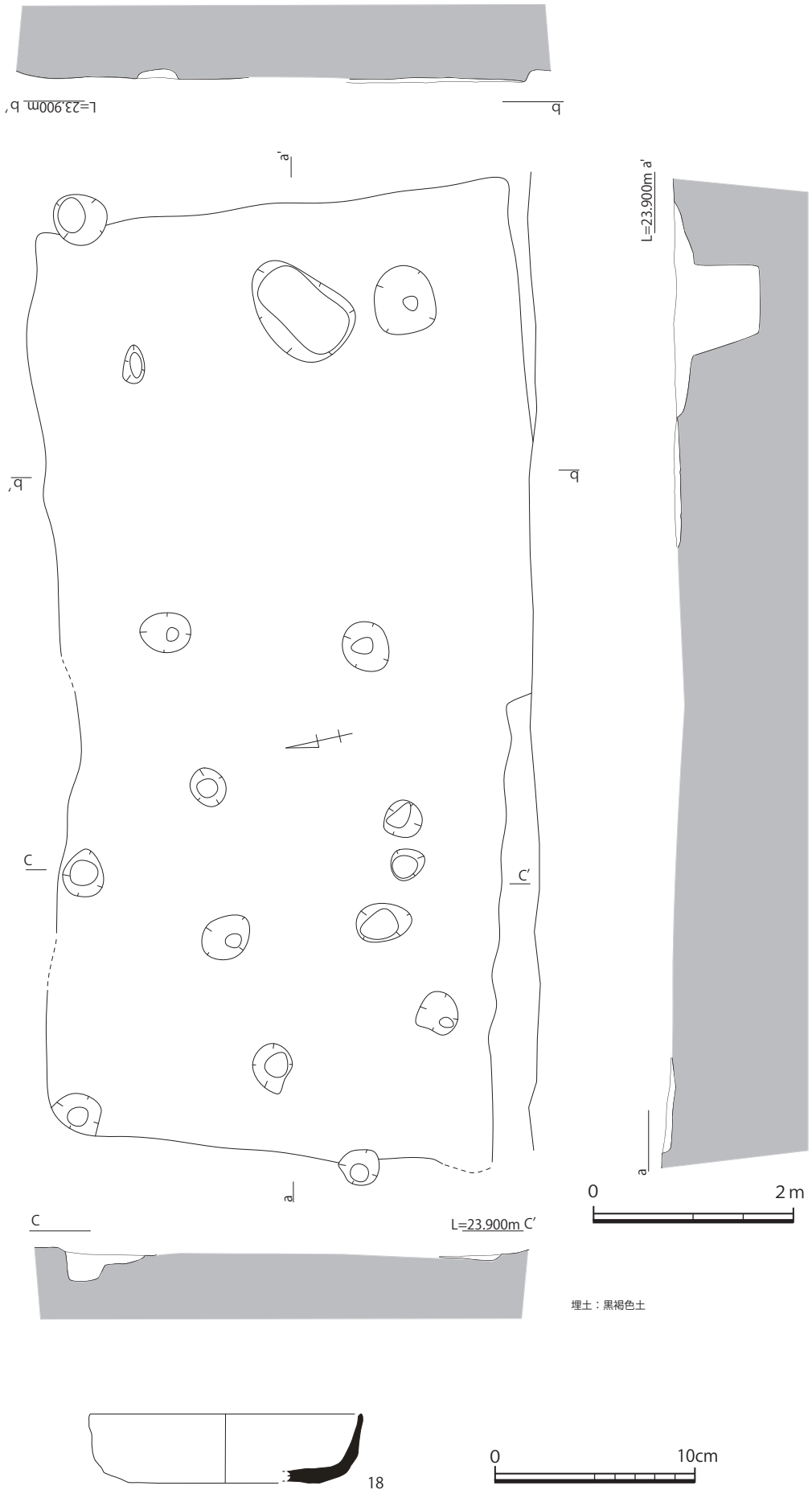


第５図　門戸口遺跡　ＳＨ５実測図（Ｓ＝1/60）・出土土器（Ｓ＝1/3）

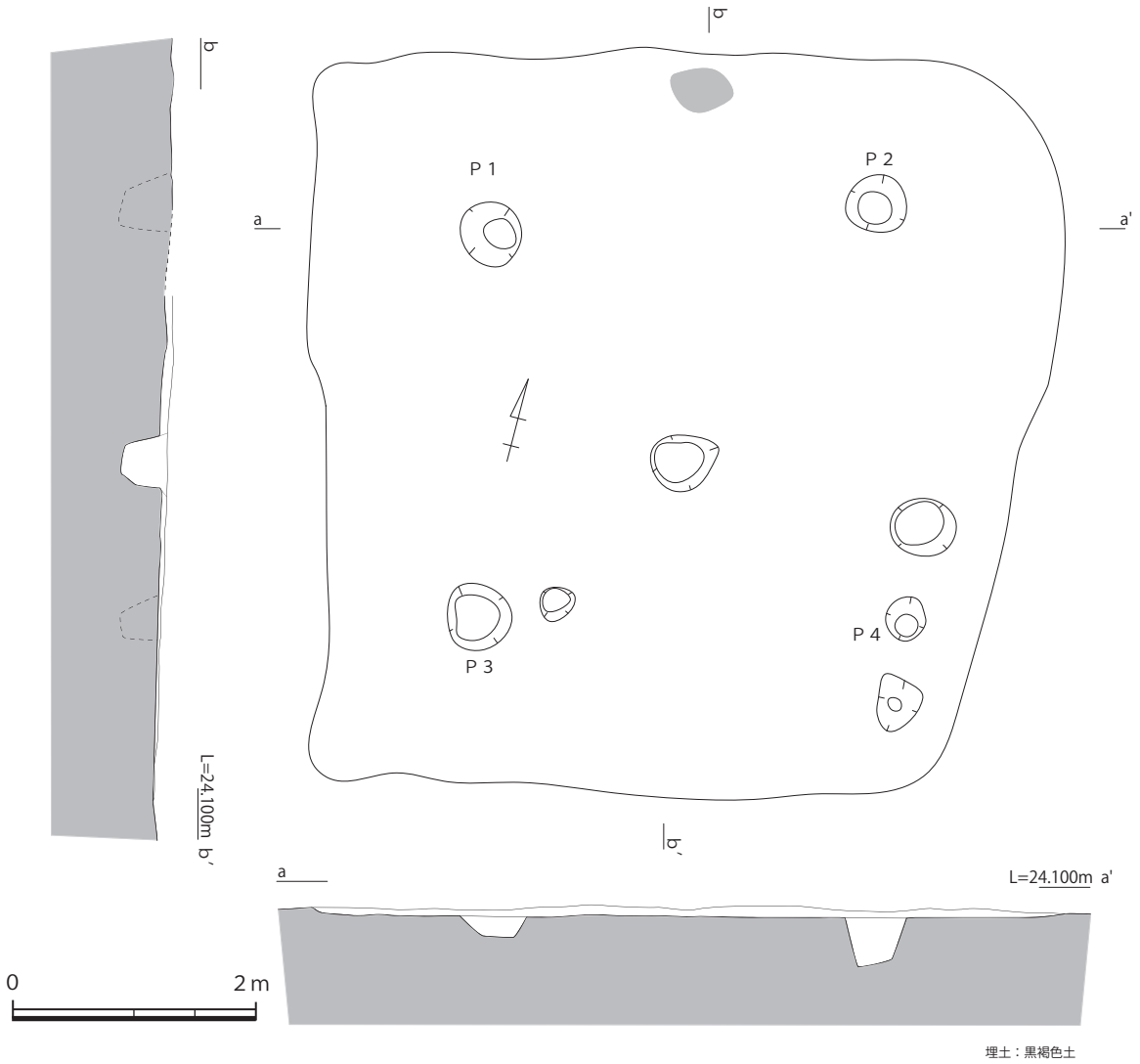




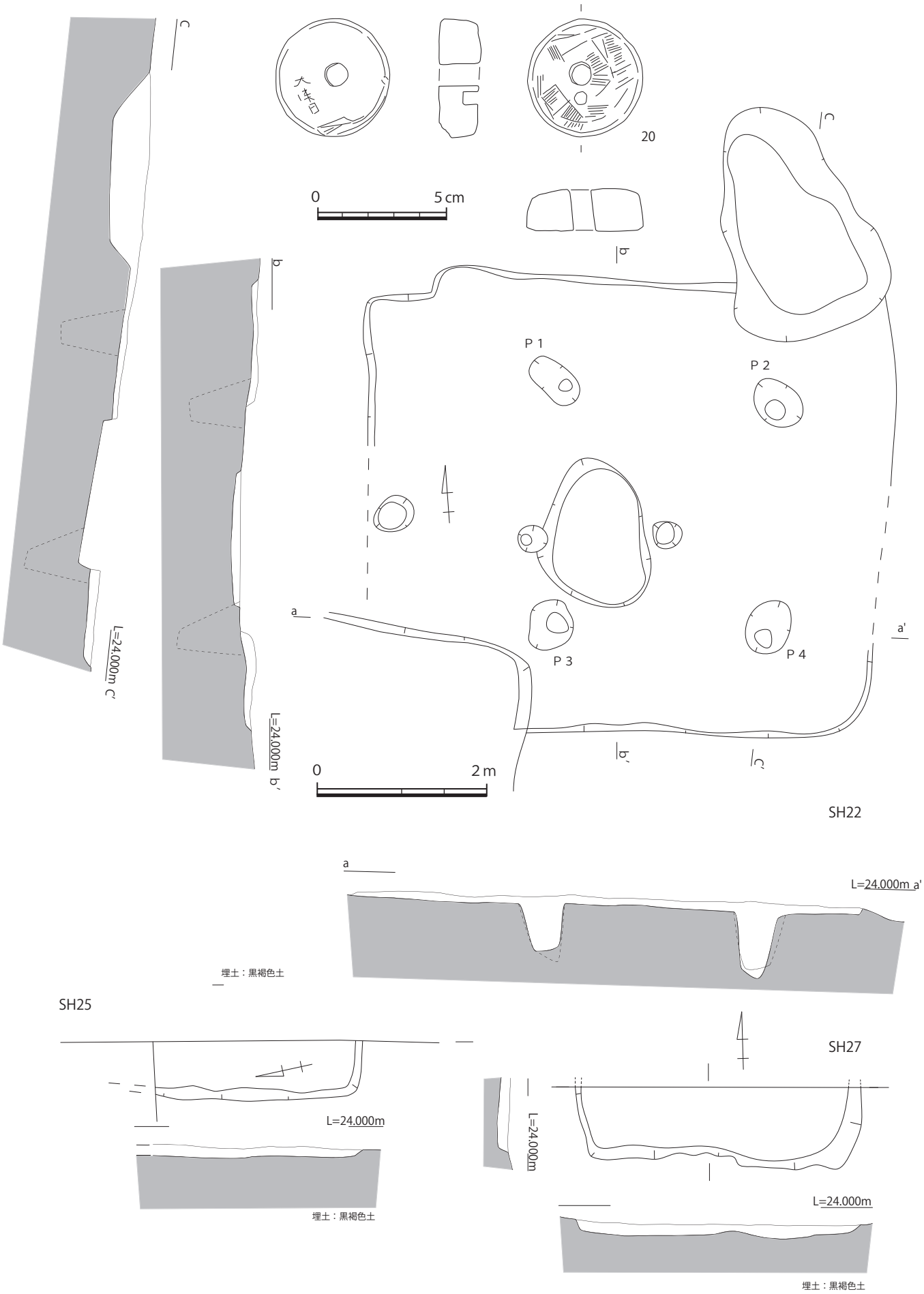
第６図　門戸口遺跡　ＳＨ９・13 実測図（Ｓ＝ 1/60）・出土土器（Ｓ＝ 1/3）



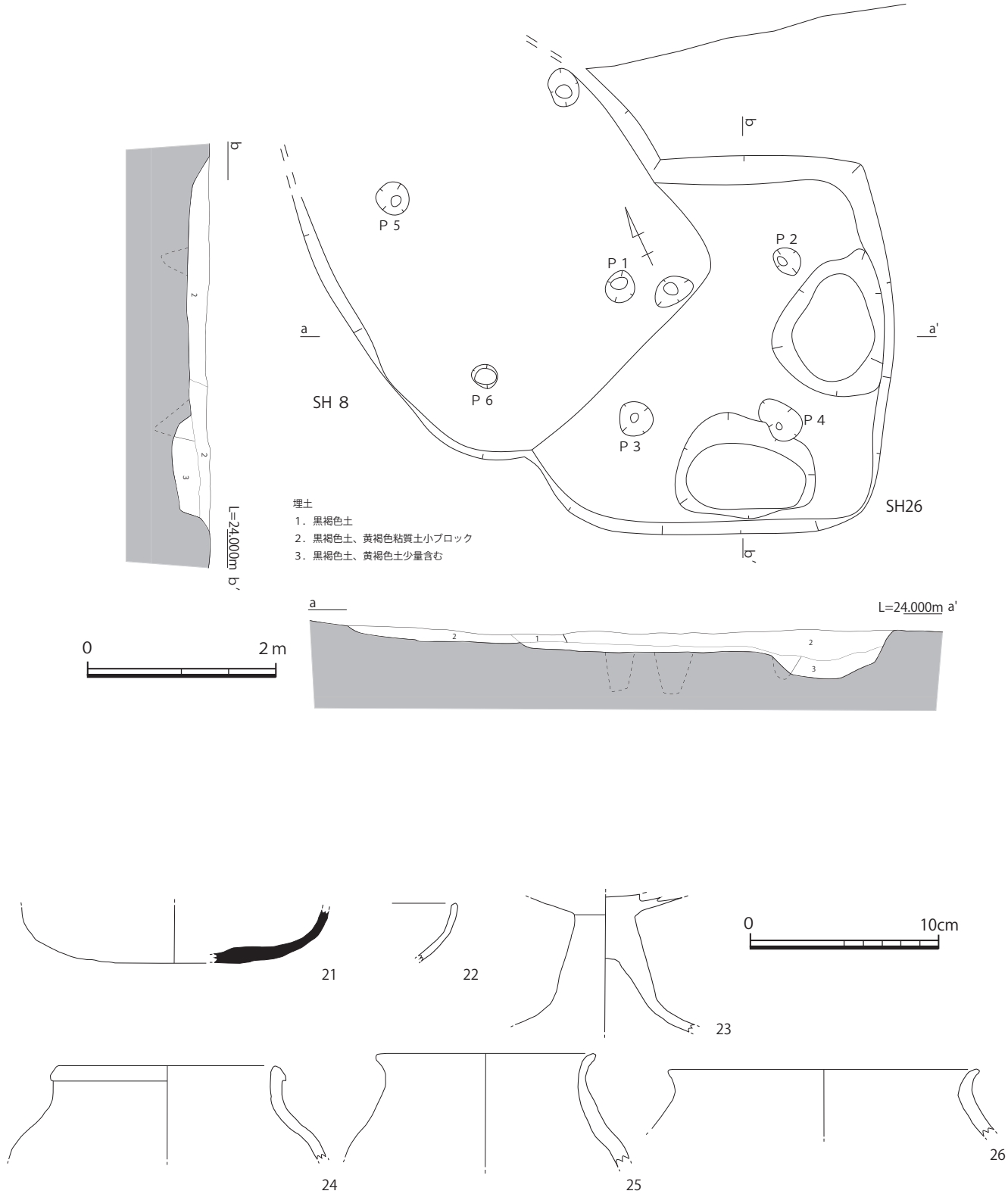
第７図　門戸口遺跡　ＳＨ 21 実測図（Ｓ＝ 1/60）・出土土器（Ｓ＝ 1/3）



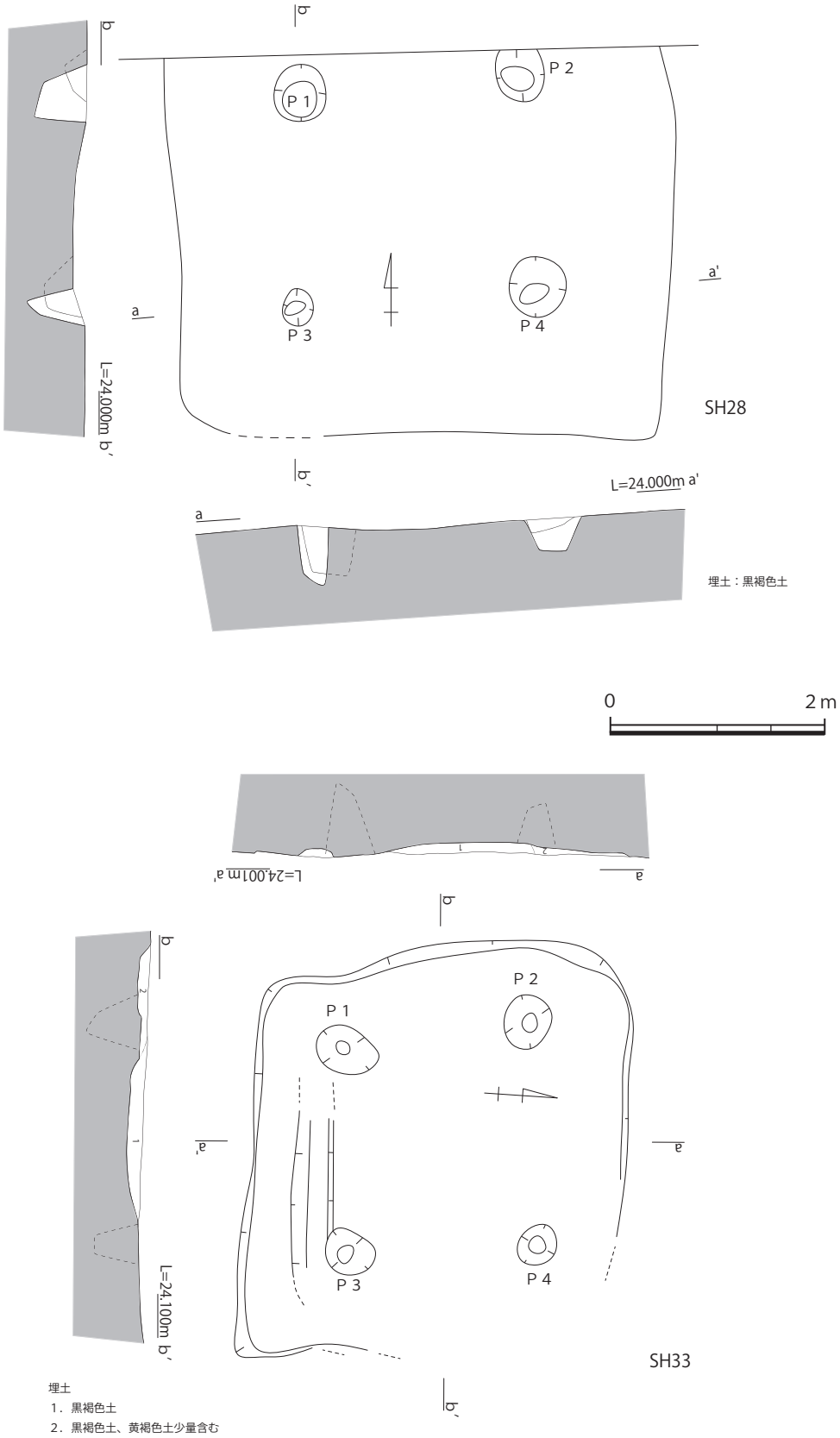
第８図　門戸口遺跡　ＳＨ 24 実測図（Ｓ＝ 1/60）・出土土器（Ｓ＝ 1/3）



第９図　門戸口遺跡　ＳＨ 22・25・27 実測図（Ｓ＝ 1/60）・ＳＨ 22 出土石器（Ｓ＝ 1/2）

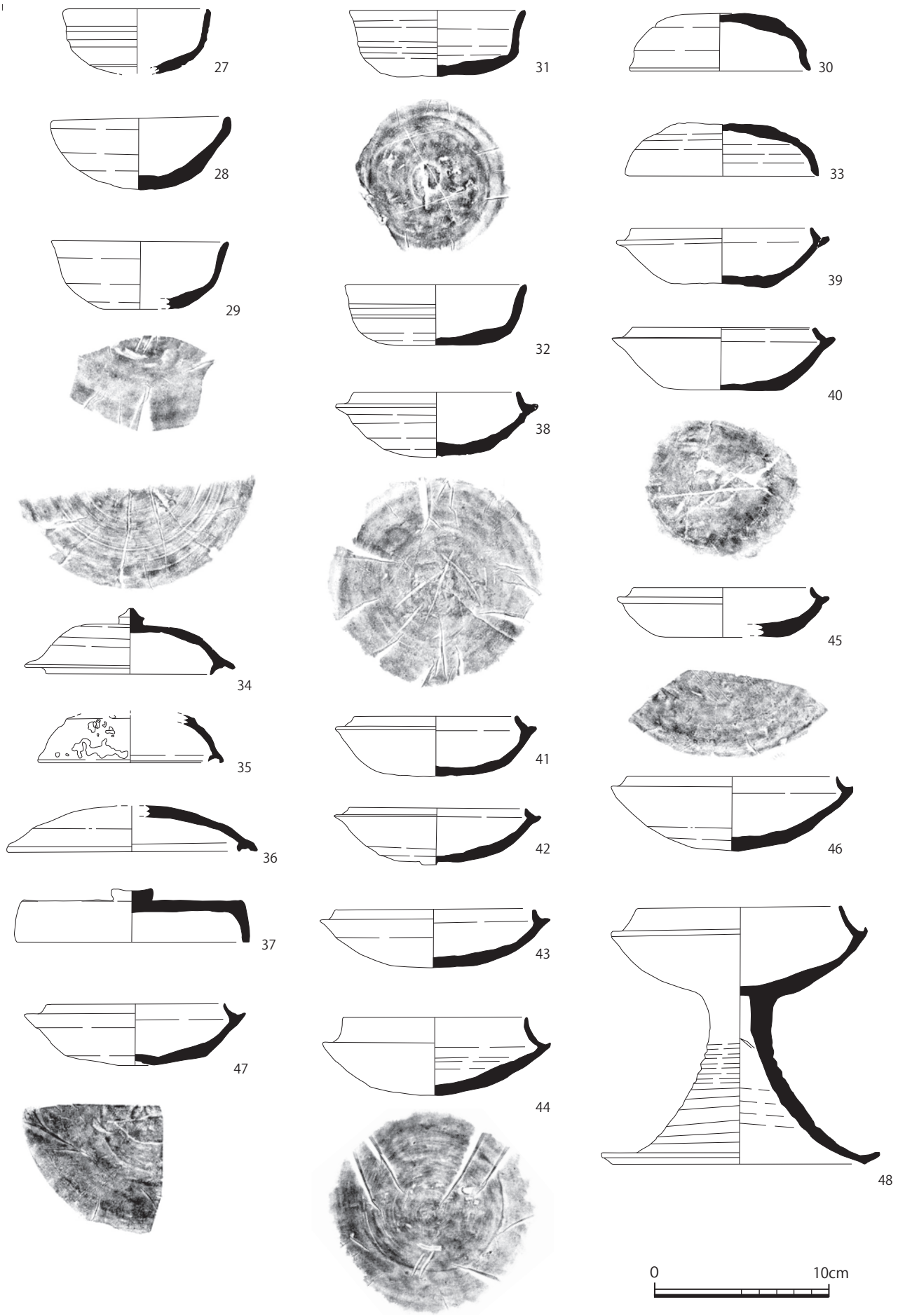


第 10 図　門戸口遺跡　ＳＨ８・26 実測図（Ｓ＝ 1/60）出土土器（Ｓ＝ 1/3）



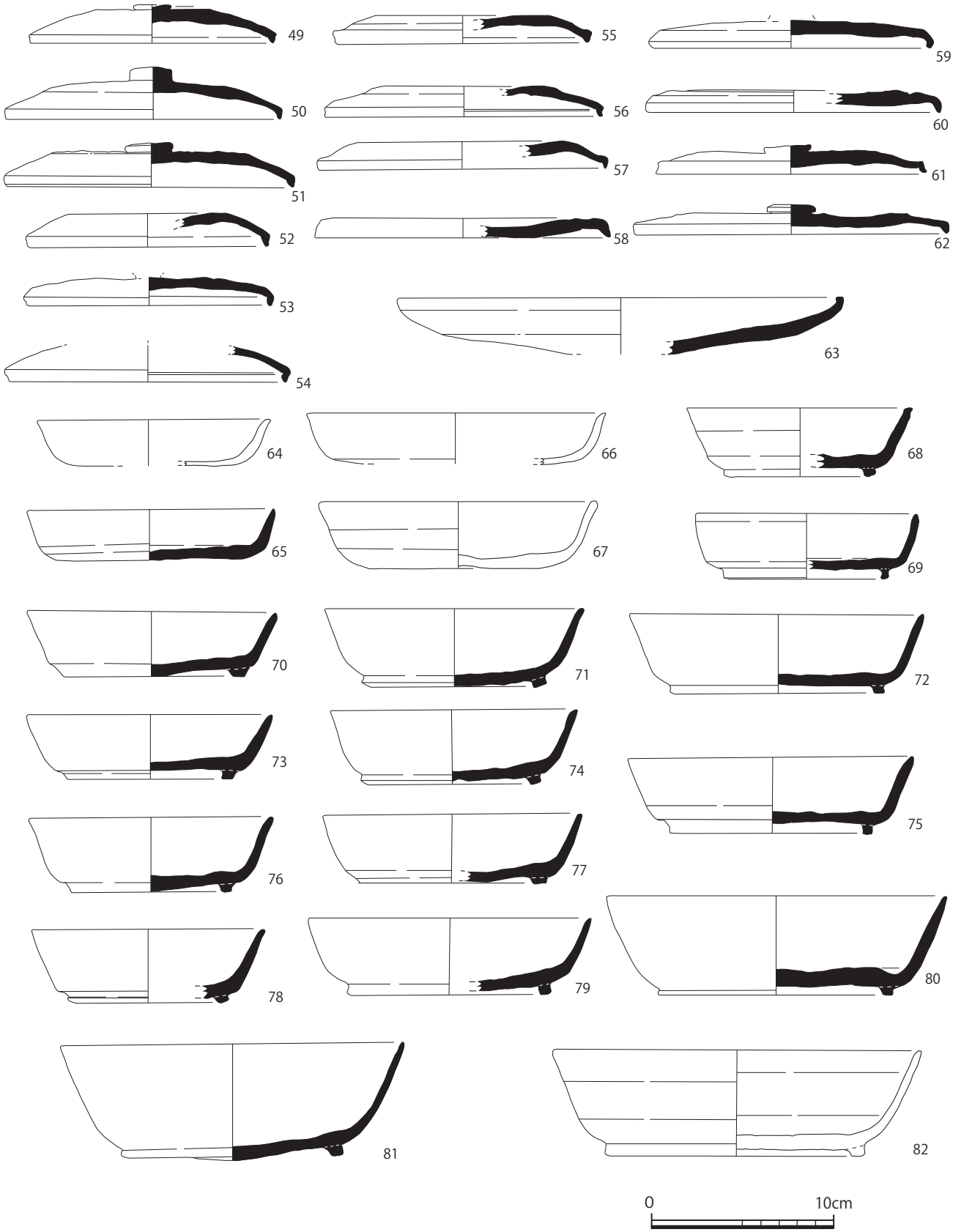
第 11 図　門戸口遺跡　ＳＨ 28・33 実測図（Ｓ＝ 1/60）

第 12 図　門戸口遺跡　ＳＫ１実測図（Ｓ＝ 1/60）

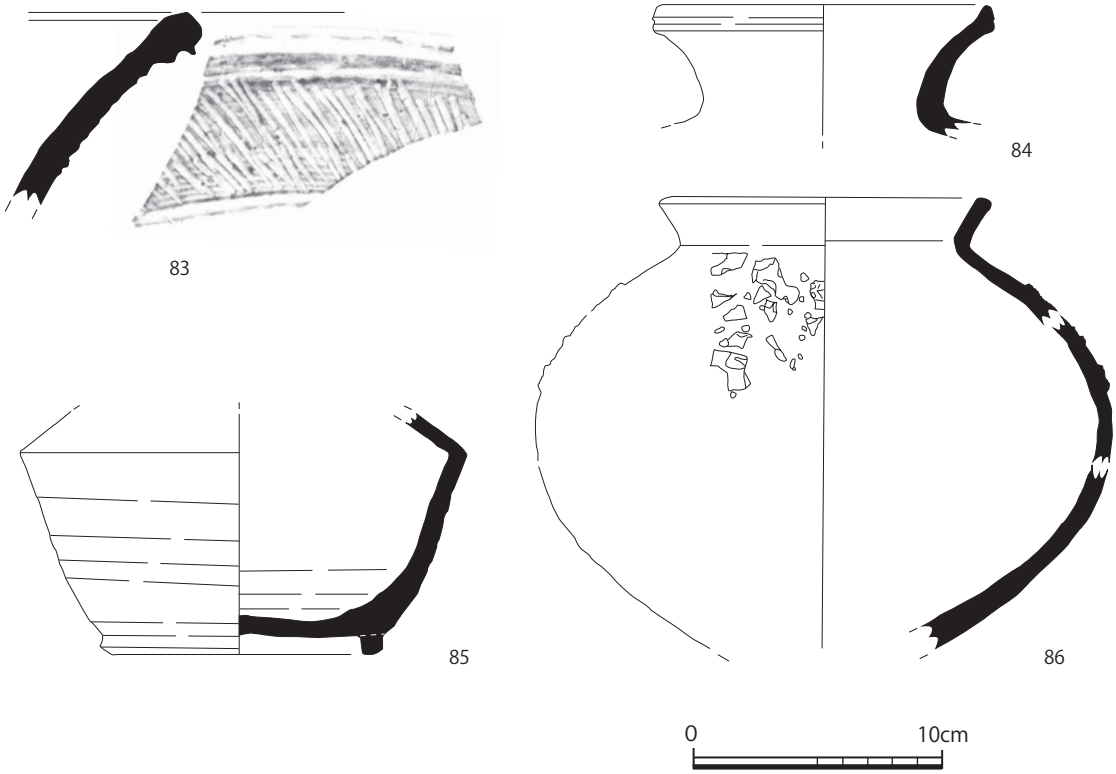


第 13 図　門戸口遺跡　ＳＫ１出土土器①（Ｓ＝ 1/3）

央が欠損しているためつまみの有無は不明。61・62 はつまみを持つ蓋である。2 点ともつまみ高は低いが 61 は頂部が平らで 62 は膨らんでいる。61 の口縁端部は外反し、62 は断面三角形をなす。63 は高杯の杯部である。下半 1 / 3 の調整はヘラケズリである。64・66・67 は土師器の杯である。64・66 は体口縁部は外反している。64・66 の口縁端部が斜めに形成されているが 67 は丸い。65 は高台の付かない須恵器杯である。68 ～ 81 は高台付杯である。68 は全体的に器壁が厚く、直線的に伸びる。高台は底部端よりやや内側につく。69 は体部から口縁部にかけてやや丸みを帯びており、高台は底部端よりやや内側に付く。70 は体部が直線的に伸び、高台は底部端に近い場所に付く。71 は口縁部が外反し底部から体部にかけて丸みをもつ。高台は底部端よりやや内側に付き、高台の内側が接地面である。72 は体部は直線的に伸び、底部から体部にかけて丸みをもつ。高台は底部端より内側に付き、平坦に設置する。73 は体部は直線的に伸び、高台は底部端に近い場所に付く。74 は体部が直線的に伸び、口縁端部が斜めに仕上げられている。高台は底部端部よりやや内側に付き、高台の内側が接地面である。75 は器壁が厚めで体部が直線的に伸びる。高台が高く、底部端より内側に付く。76 は口縁が外反する。高台は底部端より内側に付き、接地面は平坦である。77 は体部が直線的に伸びる。高台は低く、底部端に近い場所に付く。78 は体部が直線的に伸びる。底部から体部にかけて丸みを持たず角が付く。高台が底部端のやや内側に付き、高台の内側が接地面となる。79 は体部が直線的に伸びる。高台は底部端より内側に付く。80 は体部が直線的に伸びる。底部と体部の接合部は強いナデにより凹んでいる。杯部の大きさの割に高台が低く、底部端に近い場所に付く。81 は深さのある杯部を持ち、体部は直線的に伸びる。底面端のやや内側寄りに高台が付く。器壁は薄く仕上げられている。82 は土師質の高台付杯である。体部は直線的に伸び、高台は底部端に付く。表面が摩耗しているため調整は不明瞭だが、ナデ調整である。83 は須恵器壺の口縁部である。端部は丸く、外面にヘラ工具による調整が施されている。84 は須恵器壺の口縁部である。口縁端部は立ち上がり、2 重にナデによるラインが入る。85 は高台付長頸壺の胴部～底部である。高台は底部端に貼り付けられている。86 は甕である。口縁部は「く」字型で端部は平坦に形成している。肩部から胴部上半に自然釉と鉄分と砂が混ざった付着物がみられる。87・88 は口縁部が緩やかに外反する土師器甕である。89 は「く」字型に屈曲する口縁部の甕である。器壁がかなり薄い。91 ～ 93 は口縁部が大きく外反する土師器甕である。94 は口縁部が外反する土師器甕である。摩耗のため調整は不明瞭。一部黒斑がみられる。95 は口縁部が外反する土師器甕である。外面ハケ調整後口縁部ナデ調整、内面はナデ調整である。96 は緩やかに外反する口縁部をもつ土師器甕である。外面はハケ調整後ナデ、内面ナデ調整である。97 は土師器甕の「く」字形口縁で、外面ハケ調整後、ナデ調整である。98 ～ 100 は土師器甕の口縁部～胴部にかけての破片である。いずれも口縁部は緩やかに外反する。100 は外面にハケ調整がみられるが、あとは内外面ともナデ調整である。101 ～ 103 は甑の把手である。104 は甑でほぼ完形に近い状態で出土している。器高は低く、把手も短いずんぐりした形状である。器壁は工具によるタテ方向ナデ、把手の部分は指ナデ仕上げである。口縁部から胴部にかけて一部黒斑がみられる。105 は土師器甕の口縁部～胴部上半付近の破片である。口縁部は外反し、端部を丸く成形する。全体的に摩耗しているため調整は不明であるが、器壁は薄く仕上げられている。106 は土師器鉢である。底部付近は欠損している。口縁は外反し、端部は丸い。調整はハケ調整で、口縁部から胴部にかけて煤が付着している。107 は土師器甕である。底部付近は欠損している。口縁部は「く」字状で、ある。器壁が摩耗しているため調整は不明。108 は陶器の小皿である。109 ～ 111 は土師器小型甕の口縁部から胴部にかけての破片である。いずれも口縁部からくびれることなく、そのまま胴部につながる。109 は口縁部下に直径 2cm の穿孔がみられる。110・111 の外反はしないが、口縁部内面は「く」字状になり稜がはいる。112 は土師器の小型甕である。口縁部下に緩やかなくびれをもつ。113 は口縁部が外反する土師器甕の破片である。114 は口縁部が緩やかに外反する土師器甕の破片、115 は口縁部から胴部にかけてのラインが直線的な土師器甕である。外面



第 14 図　門戸口遺跡　ＳＫ１出土土器②（Ｓ＝ 1/3）



第 15 図　門戸口遺跡　ＳＫ１出土土器③（Ｓ＝ 1/3）

はハケ調整。116 は口縁が狭く胴部が張る土師器甕である。口縁部は「く」字型に屈曲する。内外面ともナデ調整で外面の広い範囲で黒斑がみられる。117 滑石製の紡錘車である。両面研磨仕上げで、表面の穿孔の周囲 0.4cm 幅でさらに研磨をおこない、その外周は 0.5cm 幅で凹んでいる。118 は須恵質の権である。

ＳＫ２　ＳＫ１の南側に位置する。平面プランは不整楕円形で、規模は長軸 3.46 m、短軸 2.37 m、最深部で 0.20 mを測る。底面はほぼ平坦で内部にいくつかピットがみられるが、埋土が異なるため土坑に伴うものではないと考えられる。

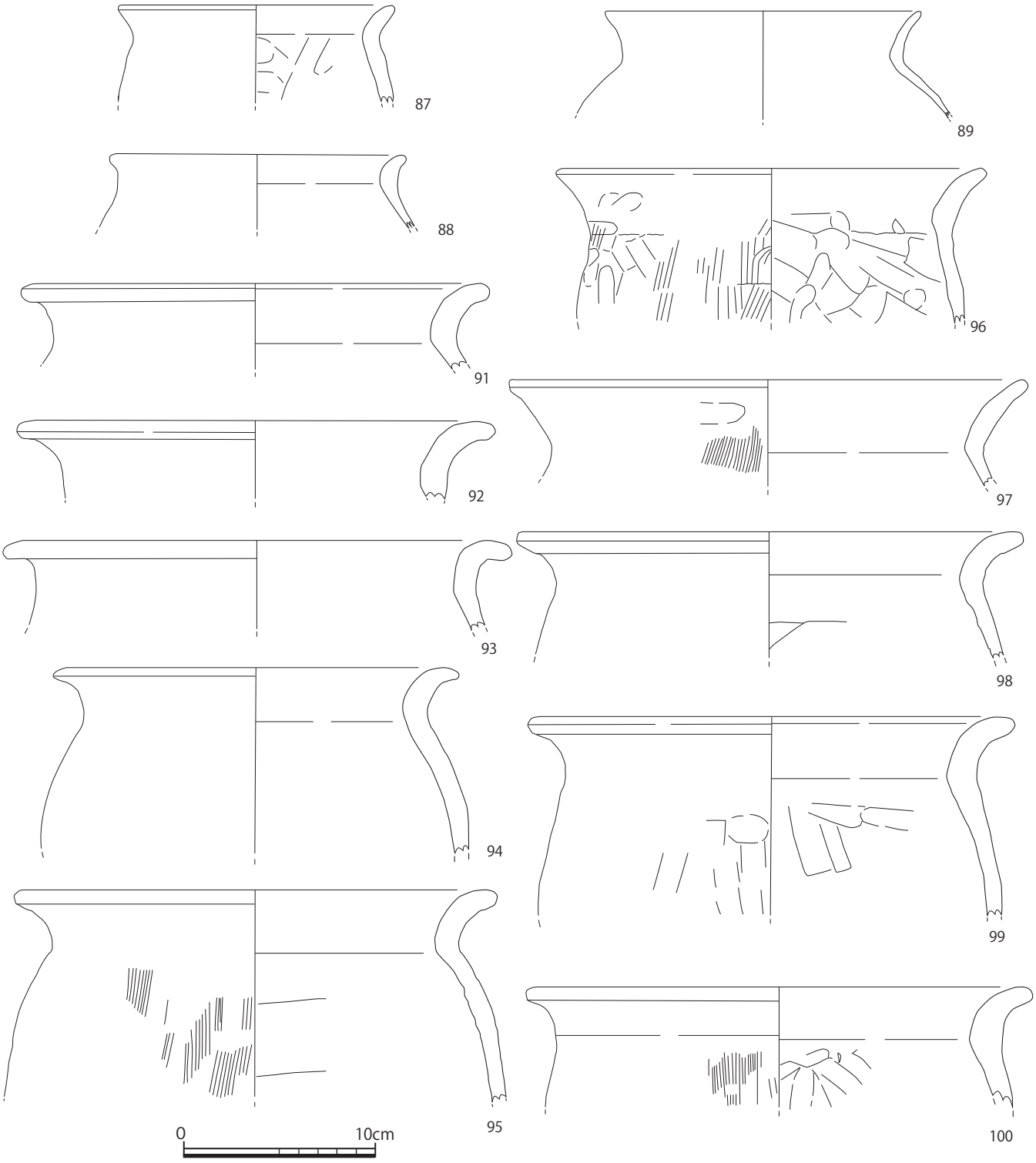
出土遺物　埋土中から須恵器と土師器が出土している。119 ～ 121 は須恵器杯蓋である。121 はつまみが付くタイプ。122・123 は高台付杯である。122 は体部は直線的に伸びるが、外への傾きが大きい。高台は高さをもち、底部端の内側に付く。123 は口縁が外反し、高台は底部端よりかなり内側に付く。124 は須恵器大甕の口縁部である。125 は土師器杯である。126 ～ 130 は土師器の甕で 126・127 は口縁が大きく外反する。128 ～ 130 は小型甕で 128 は口縁部は緩やかに外反し、129 は「く」字型、130 はつまみだしの口縁部である。131 は土師器盤状杯か。丹塗りされている。132・133 は甑の把手である。133 は中央部から大きく反って先端が上向くが 133 は直線的である。

ＳＫ６　調査区北東に位置する。平面プランは不整な角丸長方形で、規模は長軸 1.39 m、短軸 0.75 m、最深部で 0.43 mを測る。底面は平坦である。出土遺物はない。

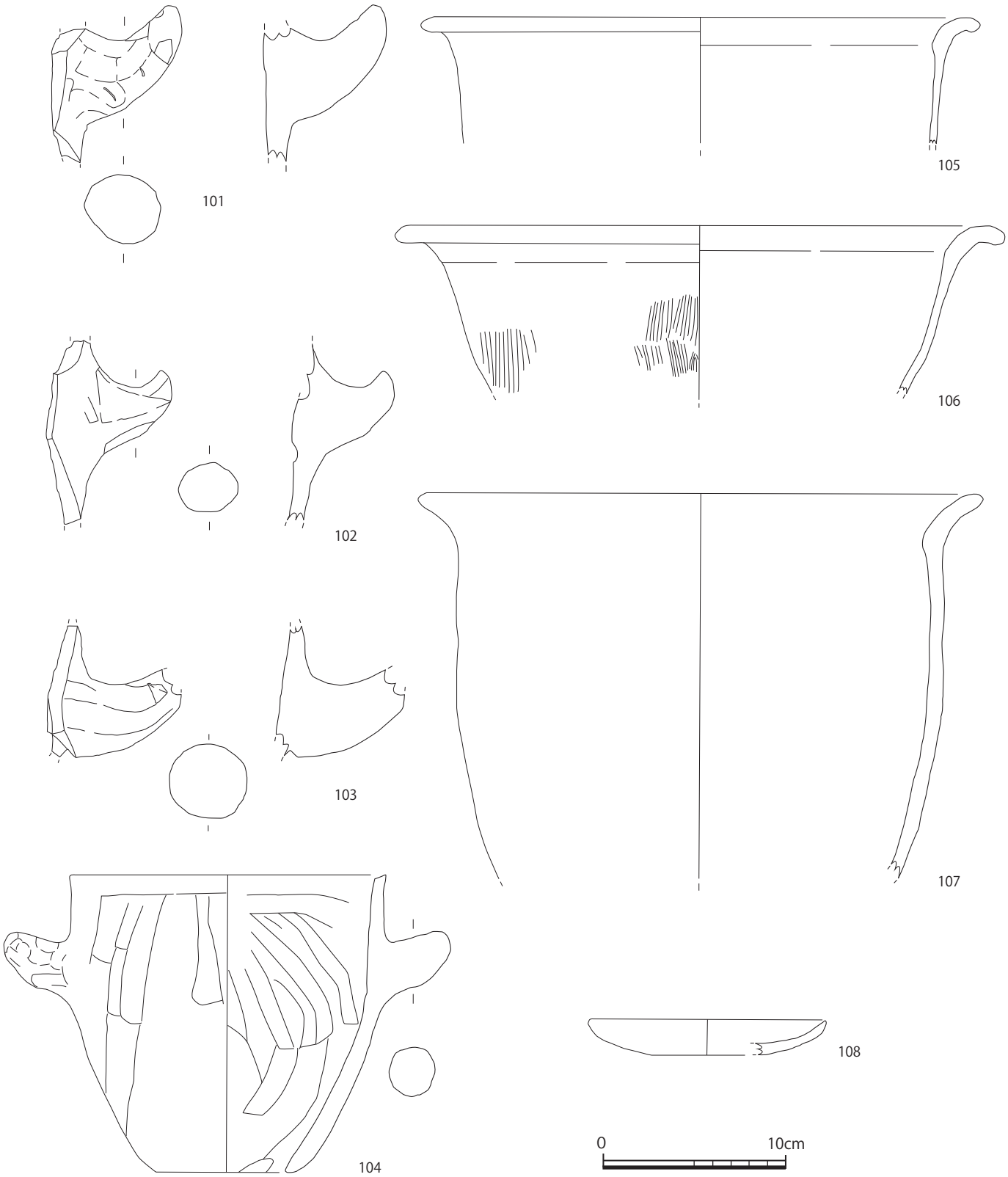
ＳＫ７　調査区中央北寄りに位置する。平面プランは不整な角丸方形で、小さな土坑を伴う。規模は 2.9 m× 3.03 m、最深部で 0.21 m、土坑は 1.14 m× 0.76 m、深さは 0.18 mである。内部に土坑を伴う竪穴建物の可能性が高い。出土遺物はない。

ＳＫ 10　調査区中央やや東寄りに位置する。平面プランは不整な楕円形で、規模は最大長 1.75m、深さは最深部で 0.34 mを測る。土坑の西側にある平場から東に向かって一段下がる。

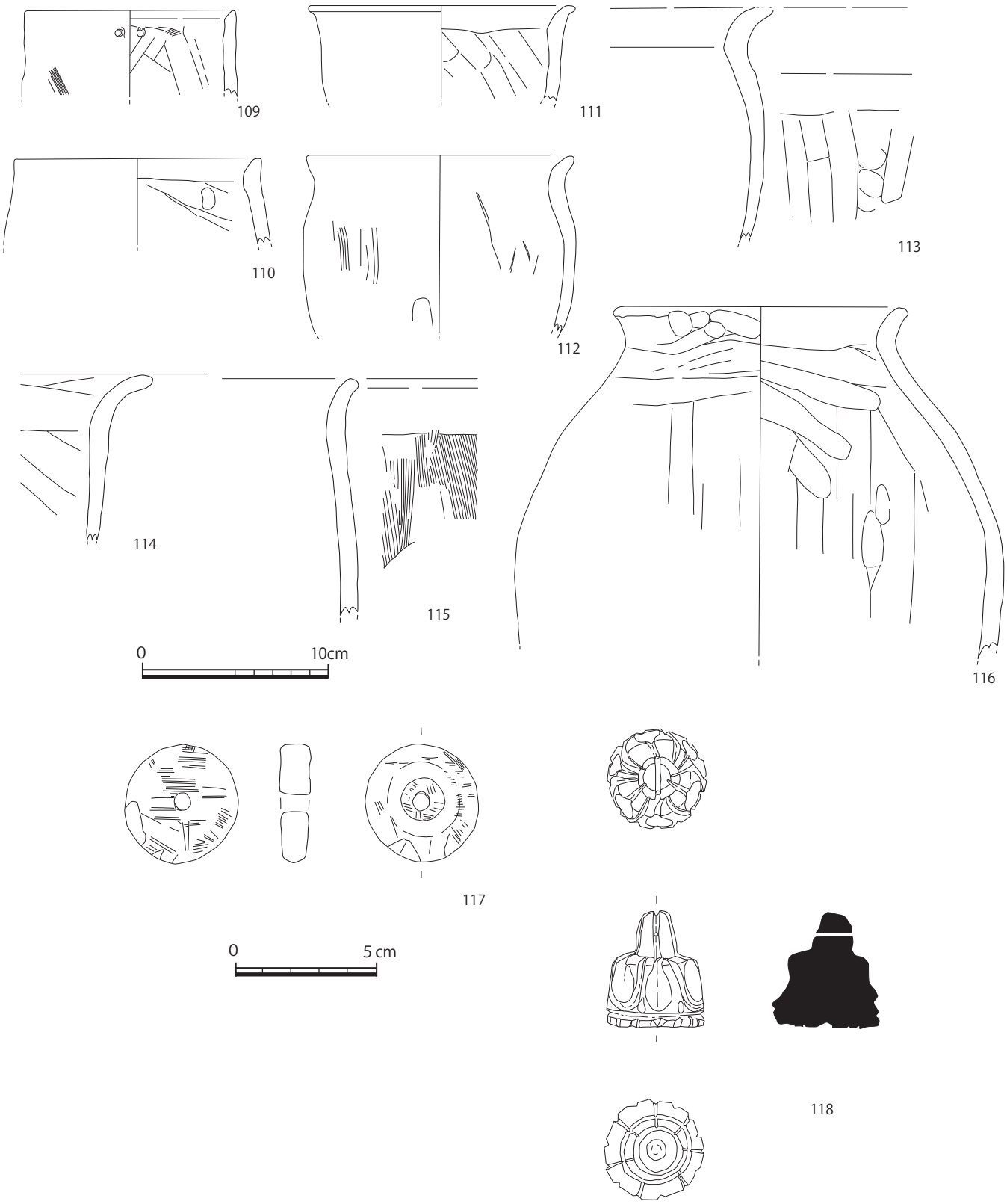
出土遺物　土師器杯が 1 点出土している。



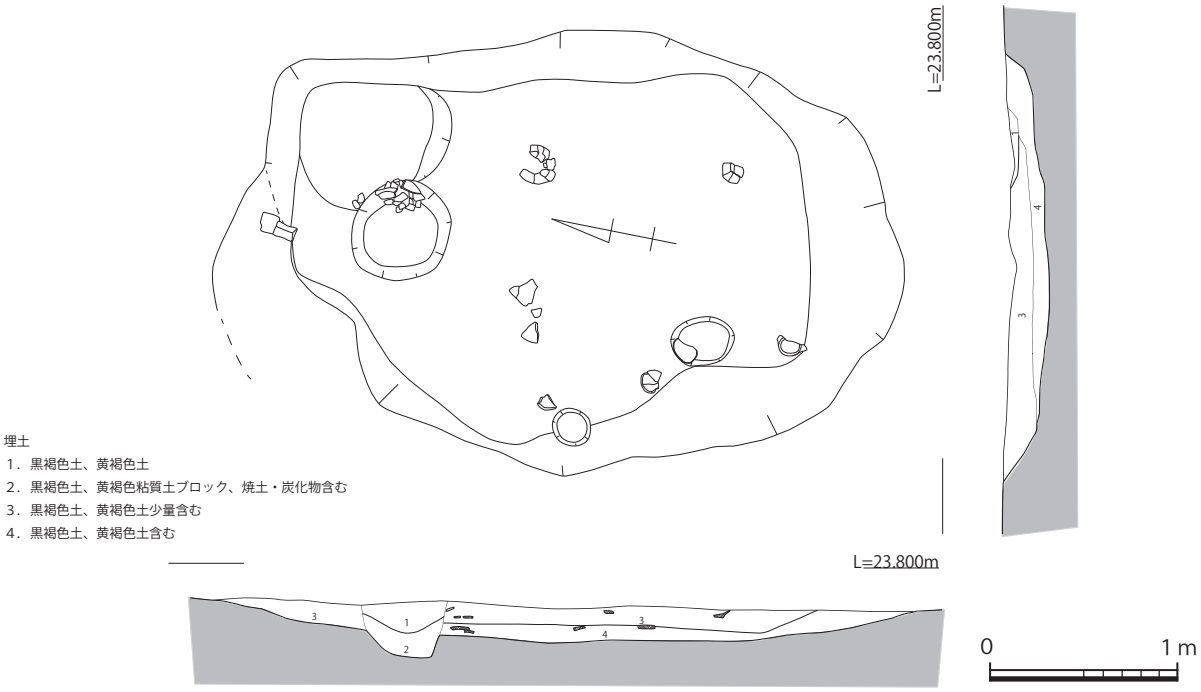
第 16 図　門戸口遺跡　ＳＫ１出土土器④（Ｓ＝ 1/3）



第 17 図　門戸口遺跡　ＳＫ１出土土器⑤（Ｓ＝ 1/3）



第 18 図　門戸口遺跡　ＳＫ１出土土器⑥（Ｓ＝ 1/3・1/2）・出土石器（Ｓ＝ 1/2）



第 19 図　門戸口遺跡　ＳＫ２実測図（Ｓ＝ 1/40）

ＳＫ 11　調査区中央に位置する。平面プランは不整な円形で最大径は 1.67 m、深さは最深部で 0.52 m を測る。西壁から東壁側向かって 1 段下がり、東壁はオーバーハングして掘られている。

出土遺物　須恵器高台付杯が 1 点出土している。高台が長く、外に向かって踏ん張るような形状である。

ＳＫ 14　調査区北西側に位置する。グラウンドの排水管が東角を切っている。平面プランは方形の土坑が２基、重複したような形状である。規模は長軸 3.22 m、短軸 2.53 m以上を測る。深さは最深部で 0.32 mを測る。

出土遺物　須恵器２点、土師器２点が出土している。136 は須恵器杯蓋である。天井部にヘラ記号がみられる。137 は須恵器杯身である。立ち上がりは長めで内傾している。調整は回転ナデ、底部付近はヘラケズリである。138・139 は土師器甕である。138 は小型で、外反する口縁部から直線的な胴部を経て、底部付近でやや膨らむ。139 は外反する口縁部はら胴部に向かって膨らむ。

ＳＫ 15　調査区西側に位置する。平面プランは不整な楕円形で、規模は長軸 3.73 m、短軸 1.89 m、深さは最深部で 0.59 mを測る。土坑西壁はややオーバーハング気味に掘られていて、東側が一段下がる。

出土遺物　須恵器杯蓋が 1 点出土している。口縁部が外反する。体部側面にヘラ記号がみられる。

ＳＫ 16　調査区西側に位置する。平面プランは不整な円形で最大径は 1.34 m、深さは最深部で 0.34 m を測る。底面は平坦である。出土遺物はない。

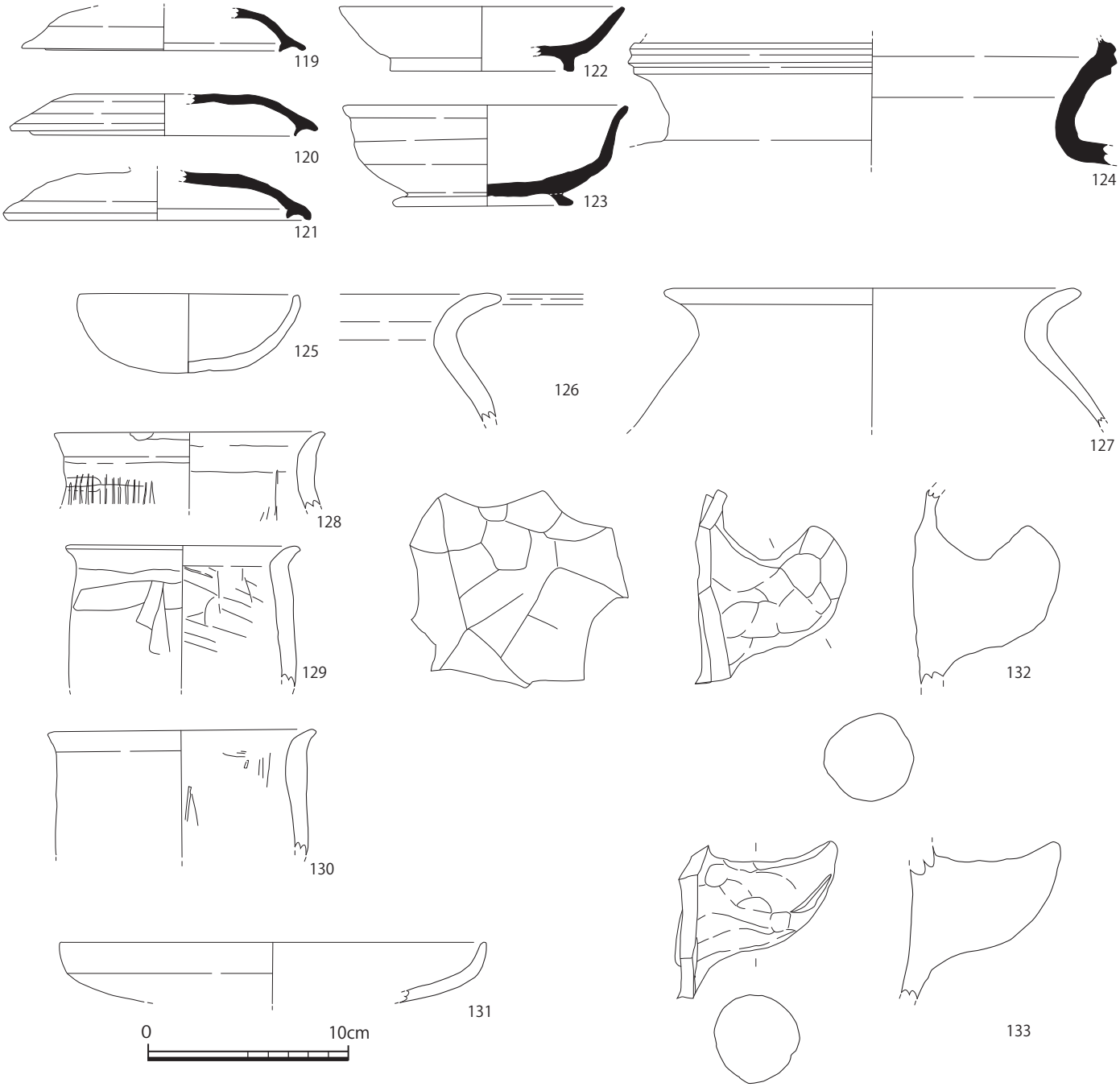
ＳＫ 17　調査区西南に位置する。平面プランは不整な楕円形で、規模は長軸 2.01 m、短軸 1.42 m、深さは最深部で 0.38 mを測る。底面は北側に一段下がる。

出土遺物　須恵器杯蓋が 1 点出土している。天井部にヘラ記号がみられる。

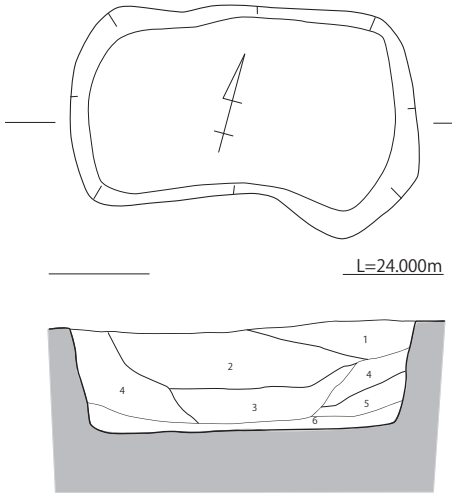
ＳＫ 18　調査区西側に位置する。平面プランは不整な楕円形で、長軸 3.88 m、短軸 2.05 m、深さは最深部で 0.23 mを測る。

出土遺物　須恵器杯身が 1 点出土している。立ち上がりは内傾しながら伸び、底面にヘラ記号がみられる。

ＳＫ 20　調査区中央に位置する。平面プランは不整な長楕円形で長軸約 3.13 m、短軸 1.21 m、深さは最深部で 0.59 mを測る。底面は中央に向かって深くなる。

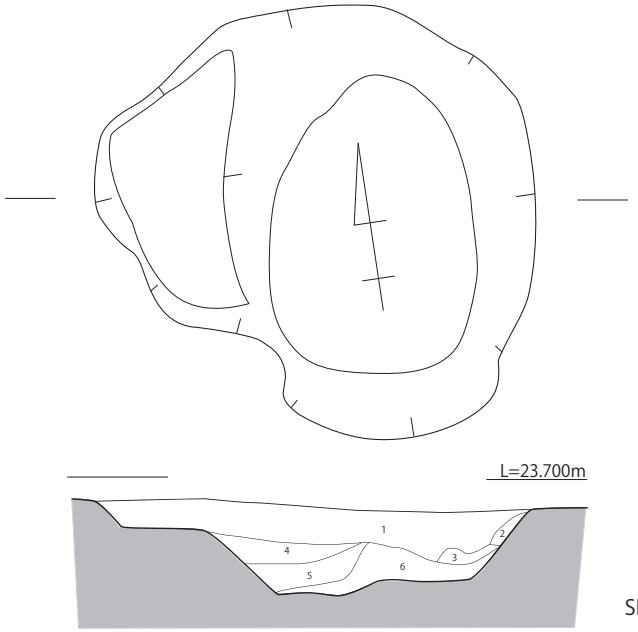


第 20 図　門戸口遺跡　ＳＫ２出土土器（Ｓ＝ 1/3）



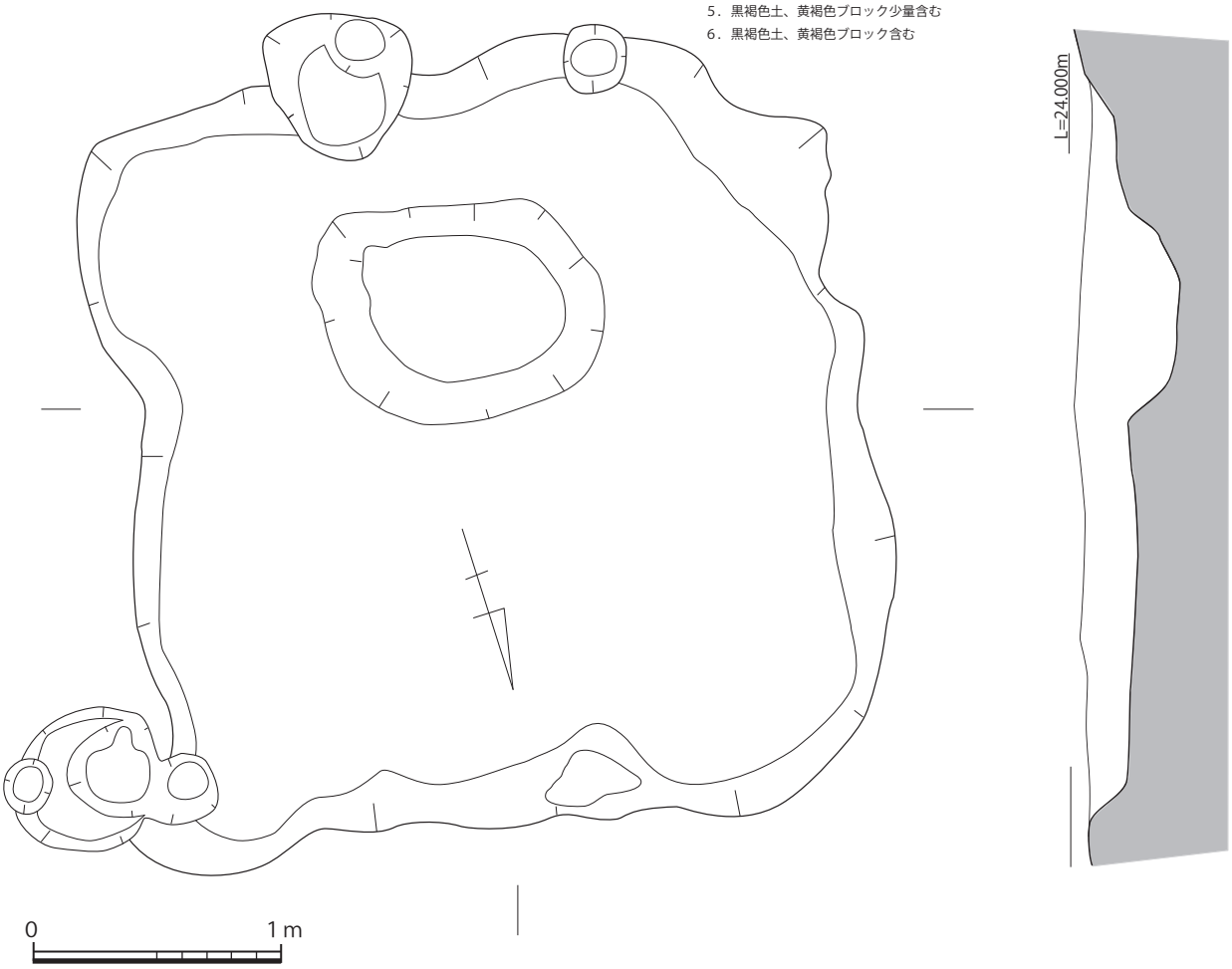
SK 6

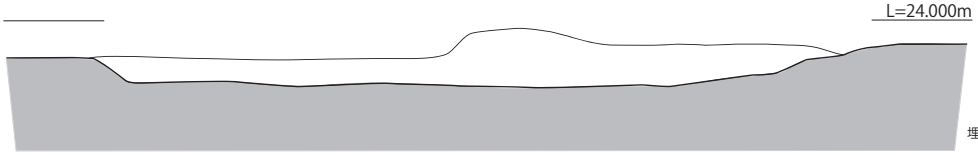
埋土
1．黒褐色土
2．黒褐色土、黄褐色ブロック
3．暗褐色土
4．黒褐色土
5．黒褐色土、黄褐色ブロック少量含む
6．暗褐色砂質土



SK10

埋土
1．暗褐色土、褐色粒、黄褐色ブロック
2．黒褐色土、黄褐色ブロック
3．黒褐色土、褐色ブロック
4．黒褐色土、黄褐色ブロック
5．黒褐色土、黄褐色ブロック少量含む
6．黒褐色土、黄褐色ブロック含む

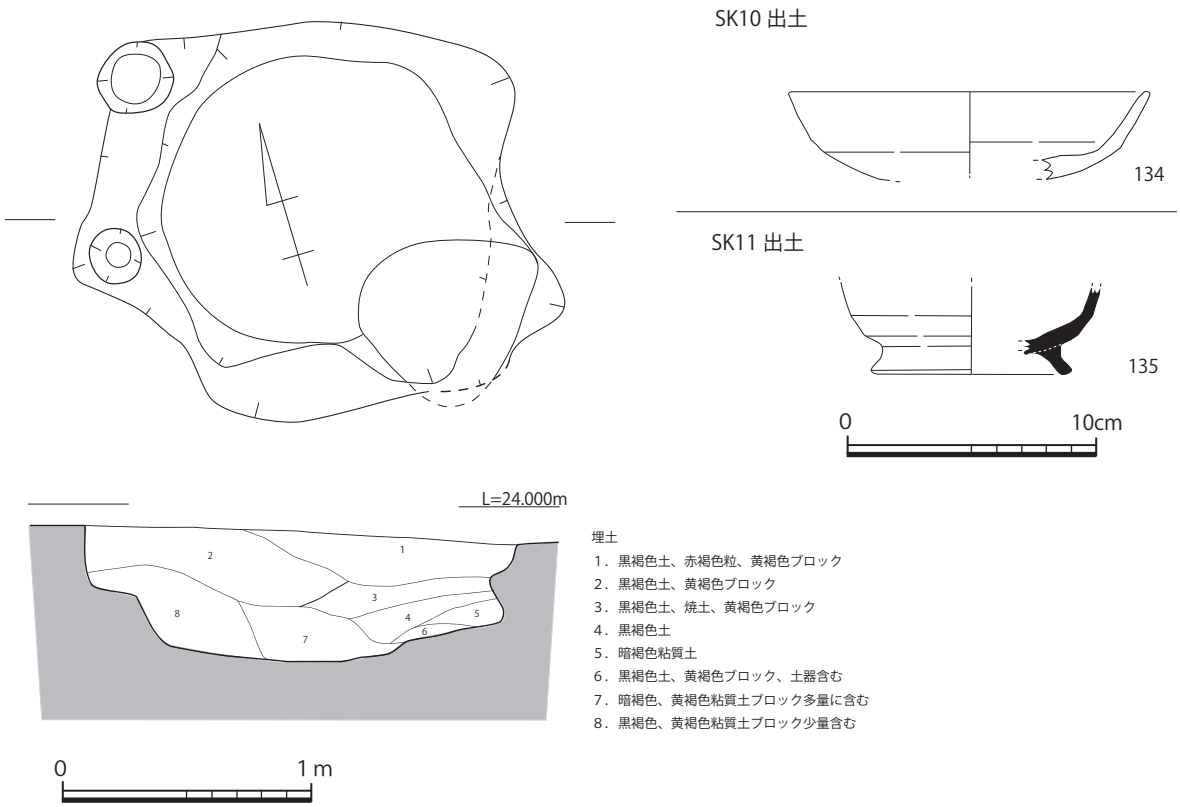




SK 7

埋土：黒褐色土

第 21 図　門戸口遺跡　ＳＫ６・７・10 実測図（Ｓ＝ 1/30）



第 22 図　門戸口遺跡　ＳＫ 11 実測図（Ｓ＝ 1/30）・ＳＫ 10・11 出土土器（Ｓ =1/3）

出土遺物　埋土中から須恵器６点、土師器１点を図化している。144 は須恵器杯身で立ち上がりは短く、まっすぐである。145 は高台付杯である。体部は直線的に伸び、高台は底部端よりやや内側に付く。149 は須恵器の小壺、146・147 は須恵器蓋で 147 はつまみが付かないタイプ。148 は盤状の杯である。底部中央が盛り上がっているため底面端部が接地する。150 は土師器甕で外反する口縁部である。

ＳＫ 23　調査区ＳＫ 11 の西隣に位置する。平面プランは不整な楕円形で規模は長軸 1.27 m、短軸 0.82 m、深さは 0.61 mを測る。出土遺物はない。

ＳＫ 29　ＳＨ５の東側に近接する。平面プランは不整な円形と楕円形の２基の土坑が重複した不整な長楕円形をしている。長軸は全体で 3.59 m、短軸は 0.56 m、深さは最深部で 0.28 mを測る。

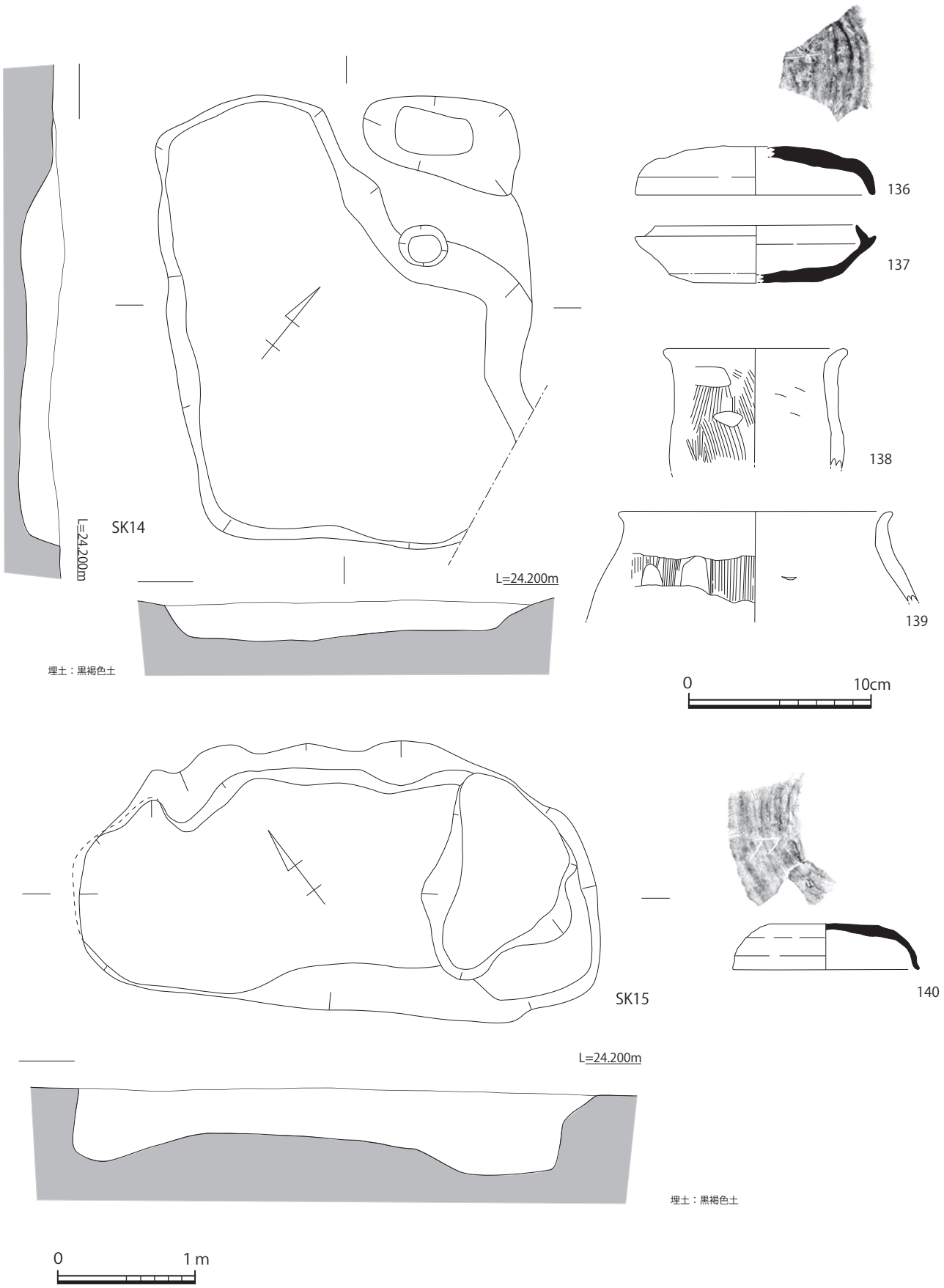
出土遺物　埋土中から須恵器杯蓋が１点出土している。

ＳＫ 32　ＳＨ 22 の北壁を切る。平面プランは不整な長楕円形で規模は 2.77 m、短軸 1.90 m、幅の狭いところで 1.17 m、深さは最深部で 0.47 mを測る。底面は北側が１段下がる。

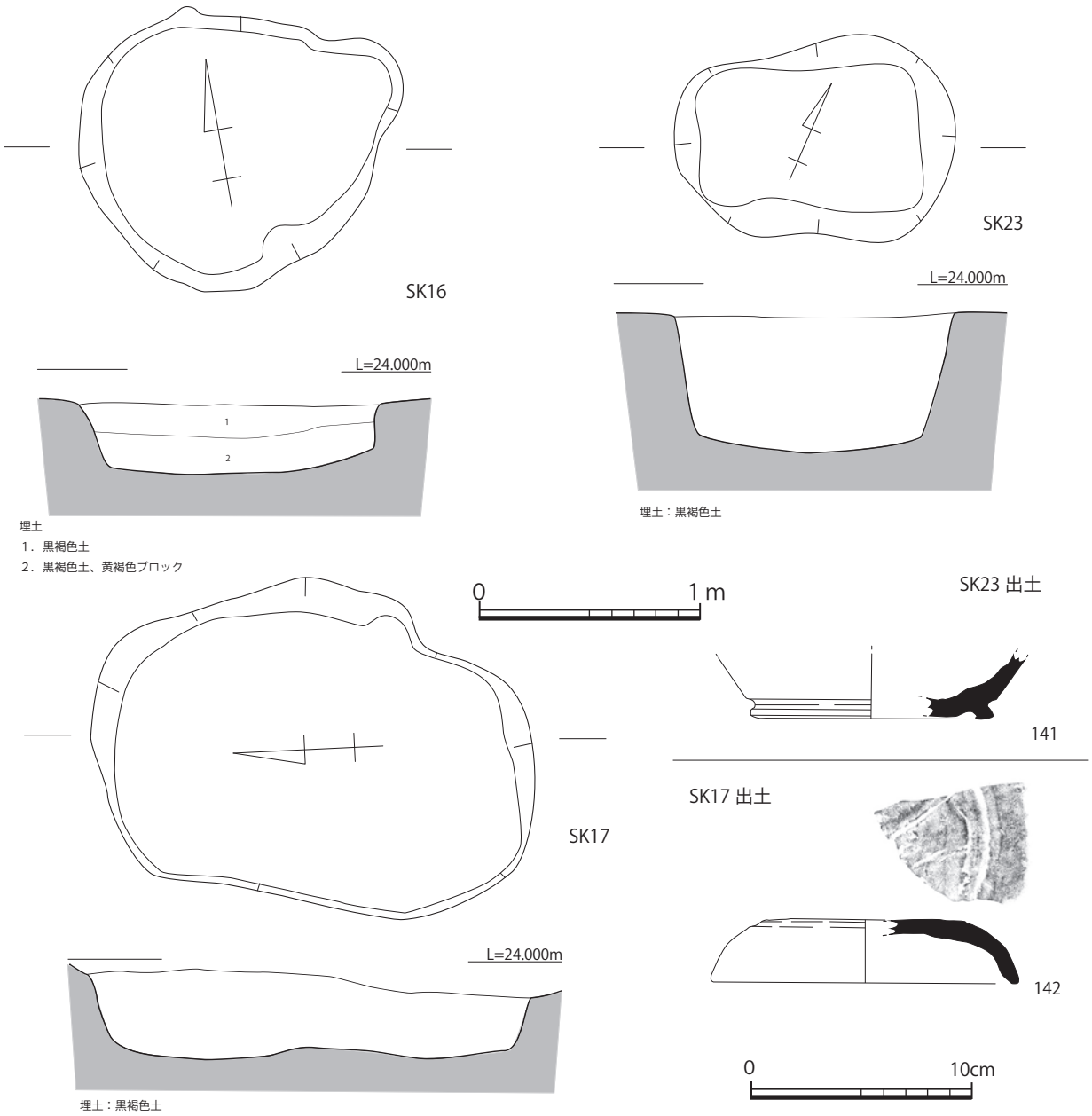
出土遺物　埋土中から須恵器と土師器が出土している。152 ～ 154 は須恵器蓋である。153・154 は断面三角形の蓋で 154 はつまみを持つ。155 は土師器杯である。底面ヘラケズリ。156 は外反する口縁部の土師器甕である。

ＳＫ 34　調査区東、ＳＨ 22 に隣接する。平面プランは楕円形で長軸 1.65 m、短軸 1.50 m、深さは最深部で 0.45 mを測る。

出土遺物　埋土中から須恵器が出土している。図化しているものは 157 ～ 162 である。157 は須恵器蓋の破片、端部断面は崩れた三角形。158・159 は高台付杯の破片で 158 の高台は底部端の内側、159 は底部端に近いところに付けられている。160 は須恵器杯蓋、161 は壺の口縁部、162 は長頸壺の胴部から底部にかけて口縁部を除きほぼ完形に近い形で残存している。



第 23 図　門戸口遺跡　ＳＫ 14・15 実測図（Ｓ＝ 1/40）・ＳＫ 15 出土土器（Ｓ =1/3）



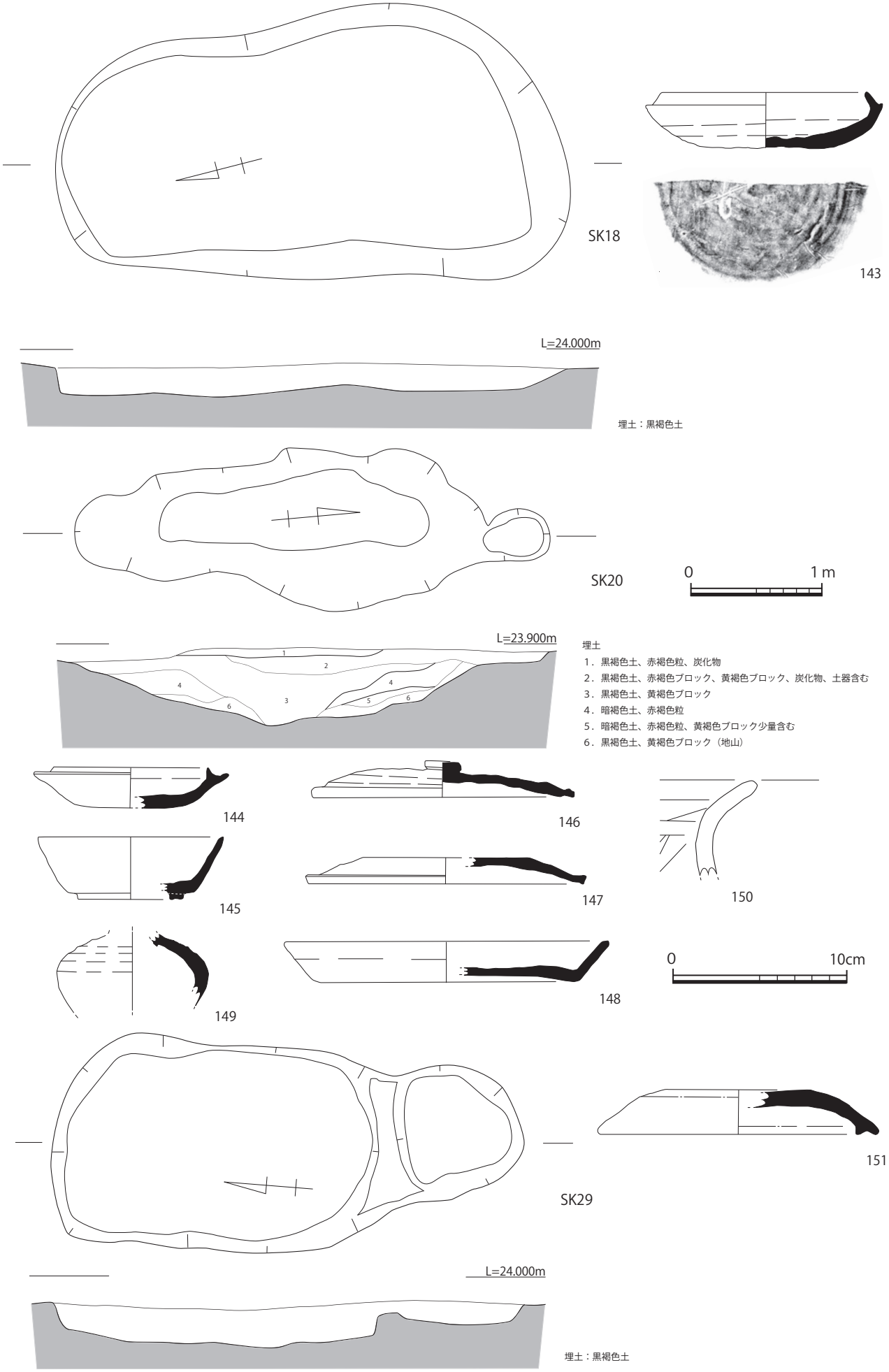
第 24 図　門戸口遺跡　ＳＫ 16・17・23 実測図（Ｓ＝ 1/30）・ＳＫ１７出土土器（Ｓ =1/3）

【掘立柱建物跡】

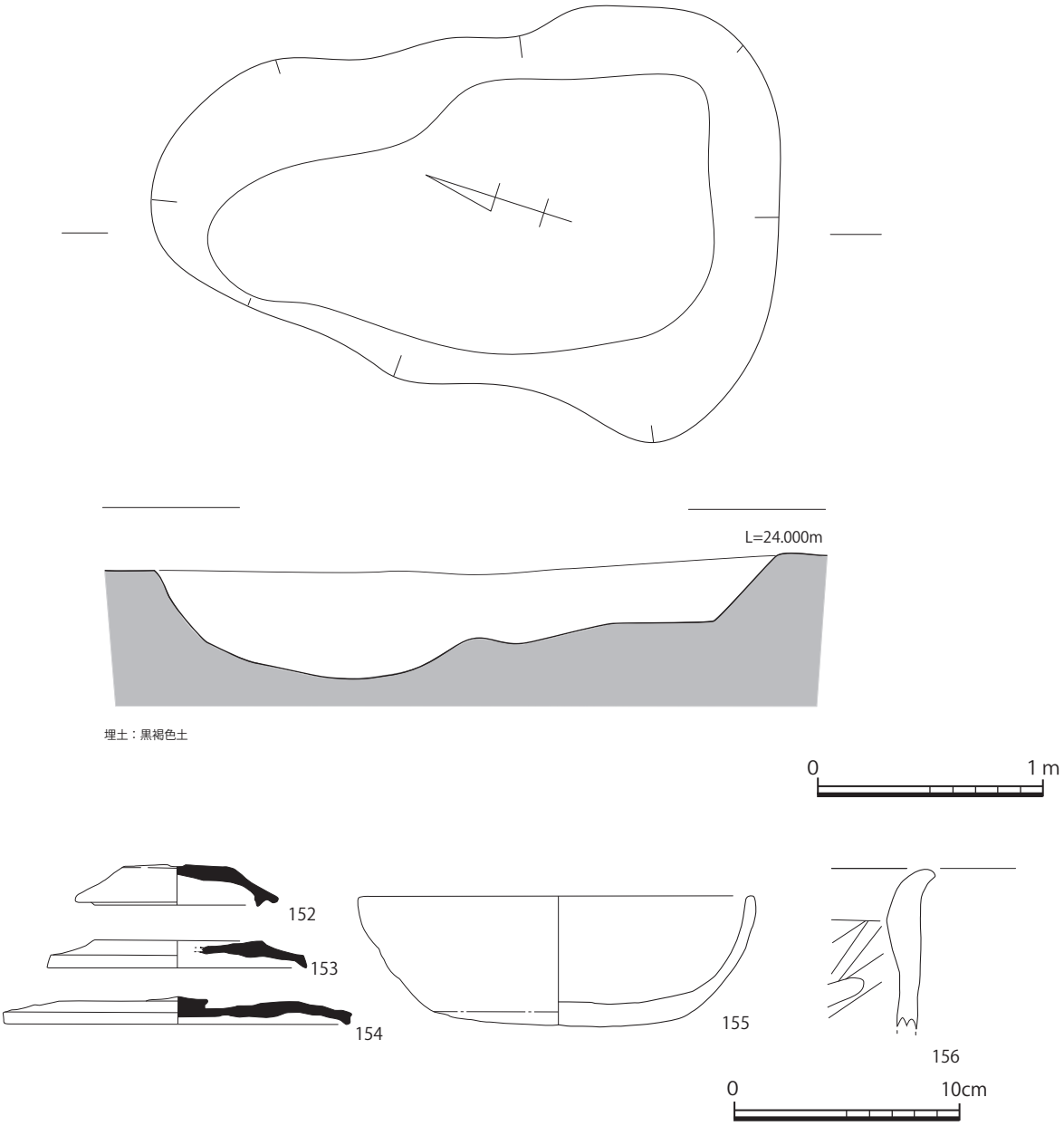
ＳＢ 35　ＳＫ１の東に隣接、主軸をＮ - ９° - Ｗにとる２間×２間の建物である。柱穴の平面形は角丸方形もしくは不整円形、規模は長軸 0.58m ～ 0.80 m、深さは最も深いもので 0.56 mを測る。柱の芯心距離は 1.4 ～ 1.6 mで柱痕跡が残るものと、柱の径に合わせて底面中央を一段深く掘るものがある。

ＳＢ 36　ＳＨ５の北壁と重複し主軸をＮ - ６° - Ｗにとる２間×２間の建物である。柱穴の平面形は円形で、規模は 0.40m ～ 0.64 m、深さは最も深いもので 0.44 mを測る。柱の芯心距離は 1.6 ～ 1.8 mで柱痕跡は確認できなかったが、柱の径に合わせ底面端が一段深く掘られている柱穴がある。

ＳＢ 37　ＳＨ 13、ＳＢ 38 と重複し、主軸をＮ - ５° - Ｗにとる２間×１間の建物である。柱穴の平面形は円形で、規模は 0.44m ～ 0.84 m、深さは最も深いもので 0.46 mを測る。柱の芯心距離は 1.4 ～ 2.4 mで底面中央が柱の径に合わせて一段深く掘られているものがある。



第 25 図　門戸口遺跡　ＳＫ 18・20・29 実測図（Ｓ＝ 1/40）・ＳＫ 20・29 出土土器（Ｓ =1/3）



第 26 図　門戸口遺跡　ＳＫ 32 実測図（Ｓ＝ 1/30）・出土土器（Ｓ =1/3）

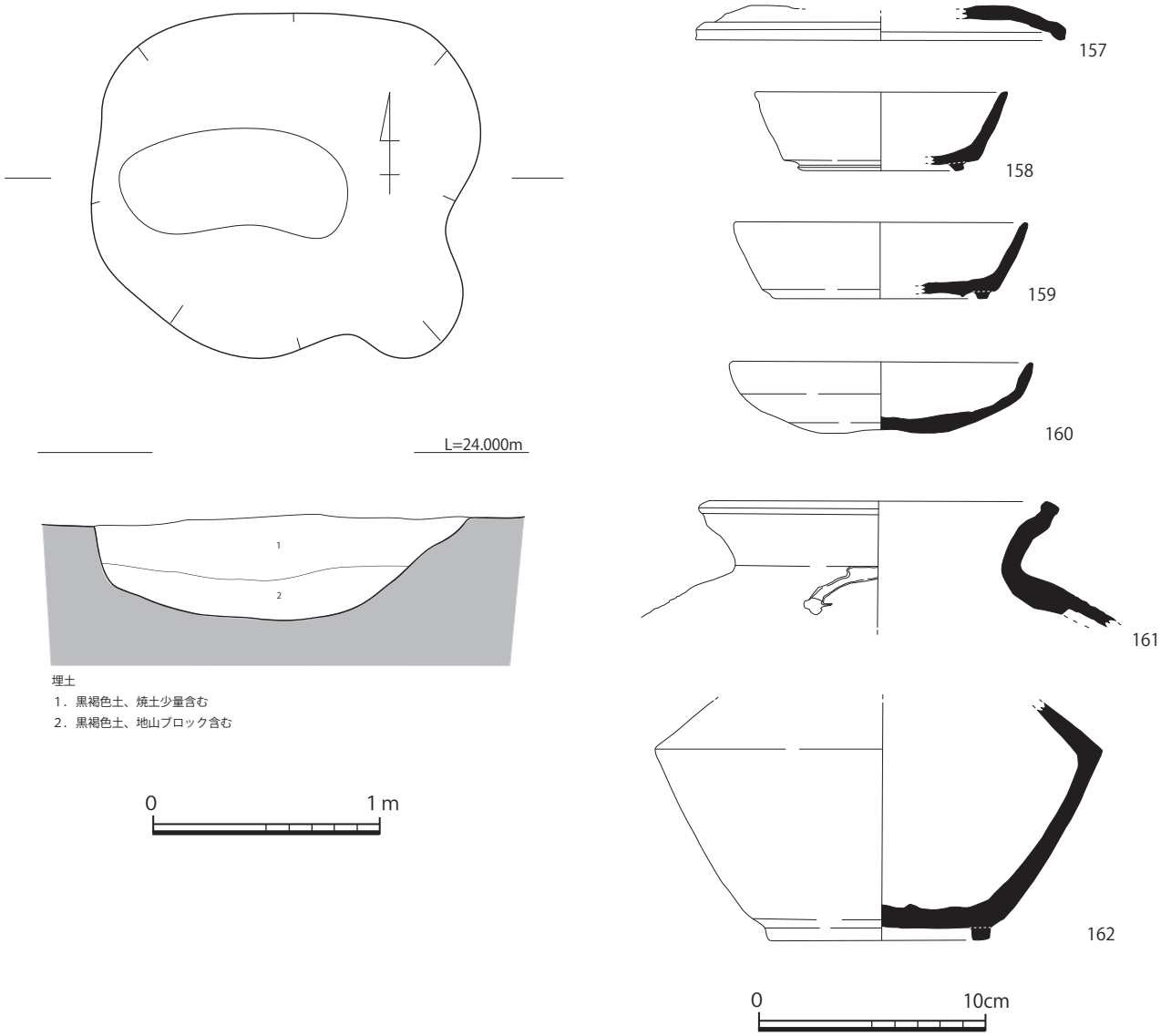
ＳＢ 38　ＳＨ 13、ＳＢ 37 と重複し、主軸をＮ - 4 ° - Wにとる２間×２間の建物である。柱穴の平面形は円形で、規模は 0.46 m～ 0.72 m、深さは最も深いもので 0.48 mを測る。柱の芯心距離は 1.6 ～ 2.08 mで底面中央が一段深く掘られているものがある。

ＳＢ 39　ＳＨ 13 の南に位置し主軸をＮ - 4 ° - Wにとる２間×２間の建物である。柱穴の平面形は円形と楕円形で、規模は 0.48 m～ 0.78 m、深さは最も深いもので 0.58 mを測る。柱の芯心距離は 1.6 ～ 1.8 mで底面の端が柱の径に合わせて一段深く掘られているものがある。

ＳＢ 40　調査区内にある建物の中で最も西側に位置し、主軸をＮ - 5 ° - Wにとる２間×２間の建物である。柱穴の平面形は円形、不整楕円形で、規模は 0.40 m～ 1.01 m、深さは最も深いもので 0.36 mを測る。柱の芯心距離は 1.6 ～ 1.8 m、底面は平坦なものが少ない。

【柵列】

ＳＡ 41　ＳＨ 5 とＳＨ 22 の間に位置し、主軸をＮ -85° - Wにとる。柱穴は東西軸で一列に並び、平面形は円形で、規模は 0.60 m～ 0.68 m、深さは最も深いもので 0.44 mを測る。底面中央が柱の大きさに合わせて一段深く掘られているものがある。



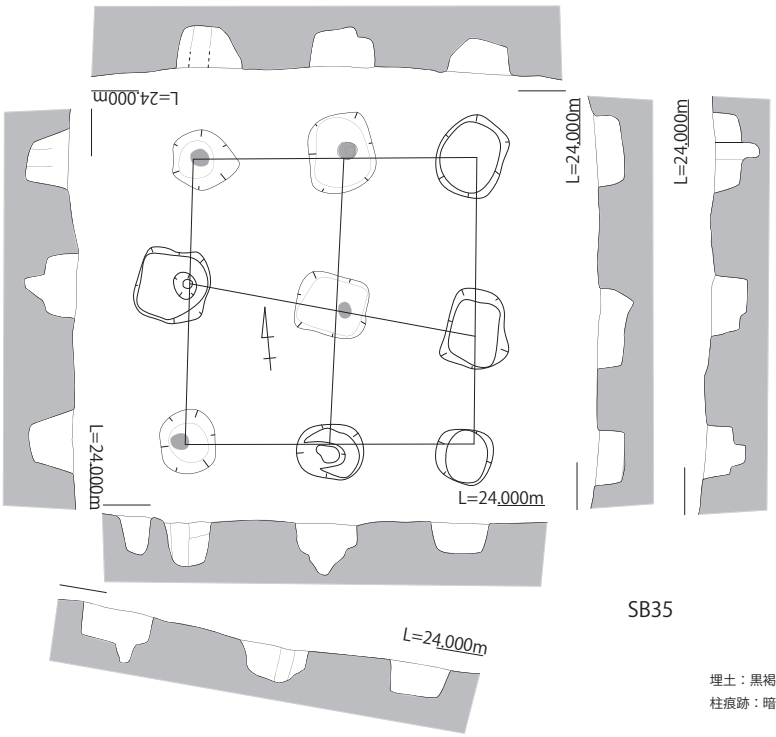
第 27 図　門戸口遺跡　ＳＫ 34 実測図（Ｓ＝ 1/30）・出土土器（Ｓ =1/3）

【溝】

調査区中央からやや東寄りに位置する。調査区北壁から西に向かってカーブし、そのまま南に向かって伸びる。掘り方は逆台形である。遺物が出土していないため時期は不明であるが、埋土の様子は他の遺構と同様であったので竪穴建物もしくは掘立柱建物跡と同時期の可能性もある。

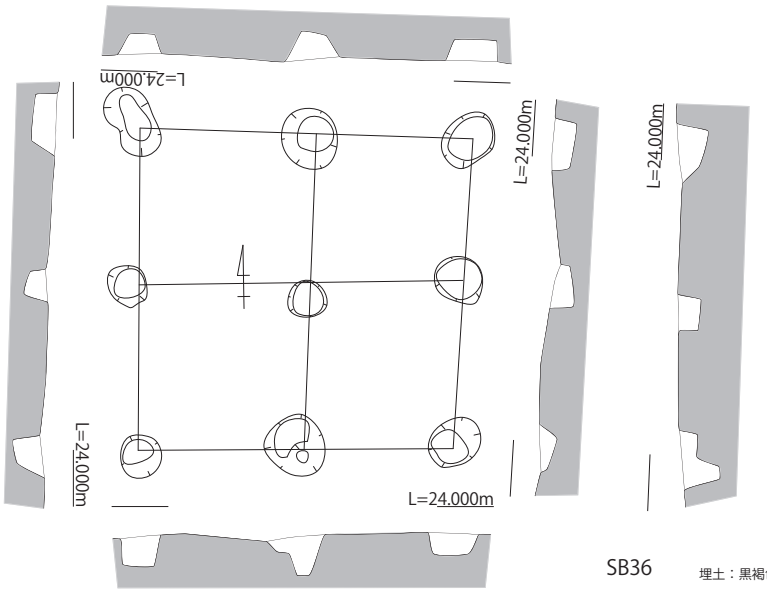
ピット出土・表採遺物　163 ～ 166・170 はピットの埋土中から出土している。163 はつまみのない杯蓋、164・166 はつまみのある杯蓋である。166・167 は端部を折り曲げた蓋であるが、166 は接地面が平坦で、167 は外反するため接地面は端部外側である。168・169 は須恵器壺の口縁部である。170 は 171 は土師器甕の口縁部である。170 は口縁が緩やかに外反し、171 は「く」字型。

鉄器　172 は片刃の鉄鏃か。173 は先端が大きく曲がる釣針状の鉄器。174 は刀子の切先から刀身の半ばまで、176 は棒状の不明鉄器、180 は三角形の鏃身、表面に木質が付着している。181 は槍鉋、切先は欠損している。186 は留金具か。先端側に 1 つ、対面に 2 つ穿孔を持ち、表面に鍍金の痕跡がみられる。177 ～ 179、182 ～ 185 は鉄滓である。



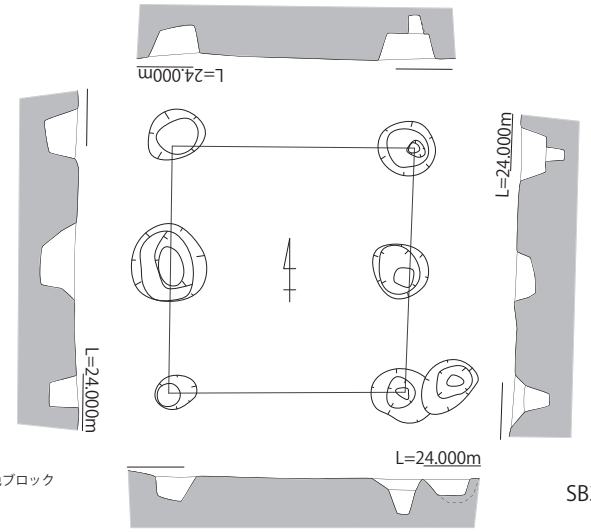
SB35

埋土：黒褐色土、黄褐色ブロック
柱痕跡：暗褐色、褐色小ブロック



SB36

埋土：黒褐色土、黄褐色ブロック

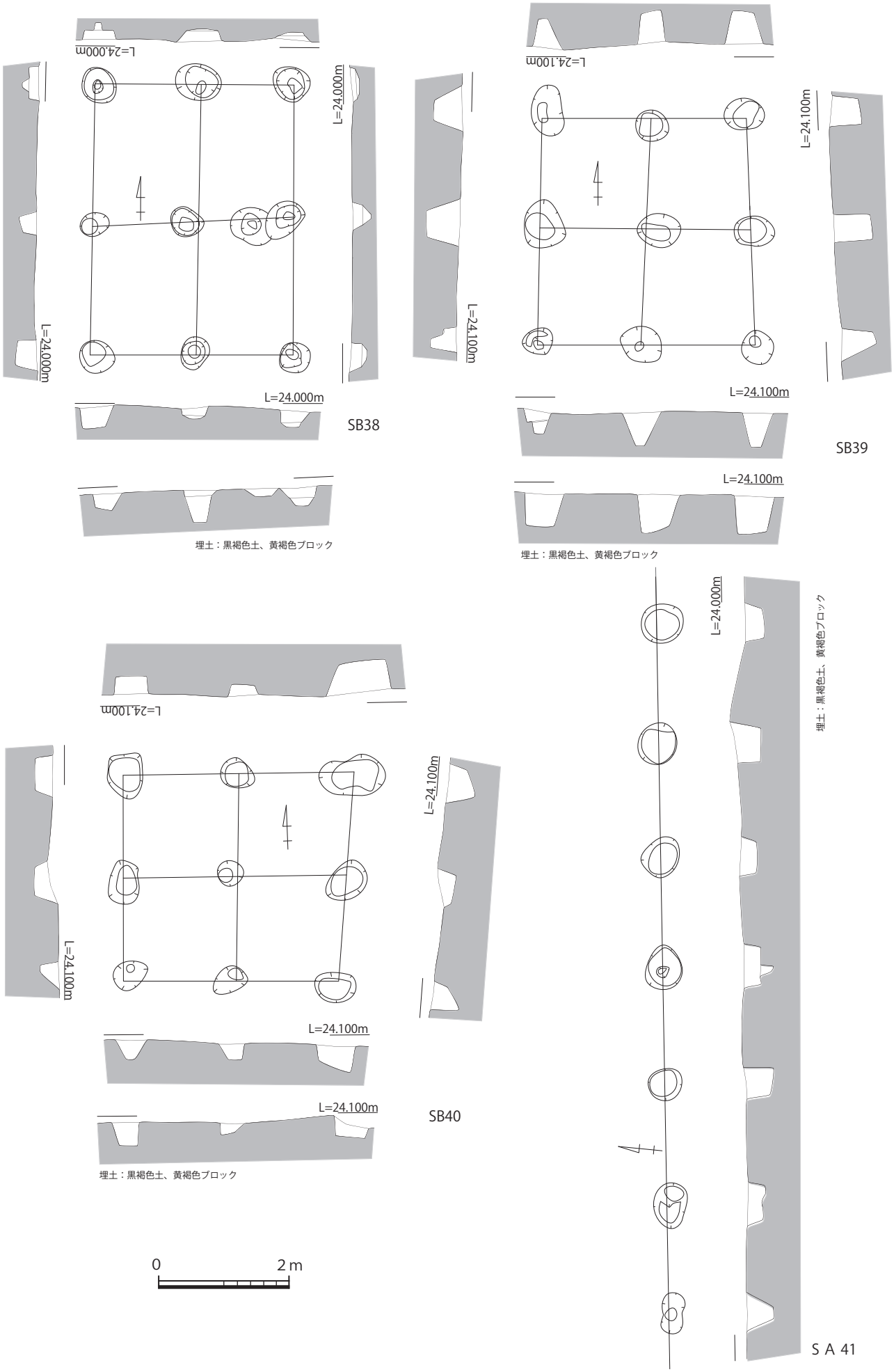


埋土：黒褐色土、黄褐色ブロック

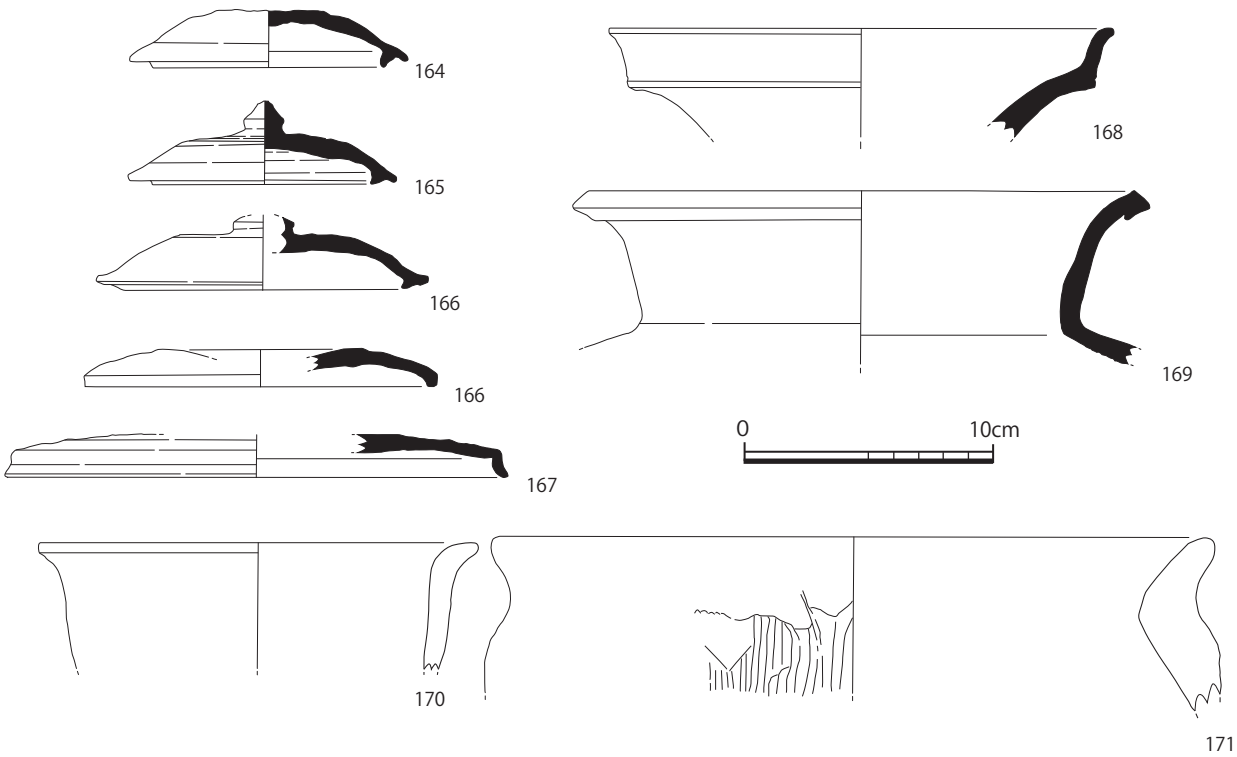
SB37

0　2 m

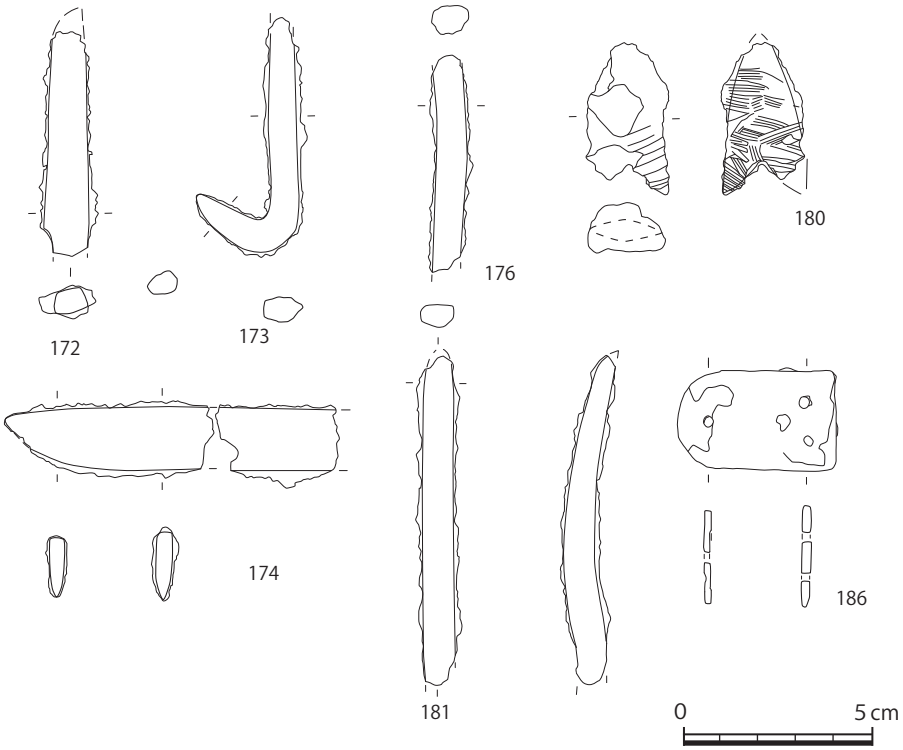
第 28 図　門戸口遺跡　ＳＨ 36 ～ 38 実測図（Ｓ =1/80）



第 29 図　門戸口遺跡　S H 39・40・S A 41 実測図（S＝1/80）



第 30 図　門戸口遺跡　出土土器（S =1/3）



第 31 図　門戸口遺跡　出土鉄器（S =1/2）

表１　門戸口遺跡出土土器類観察表

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量（　）は復元 <　> は残存			胎土	調整		色調	焼成	備考	登録番号
				径（cm）	高さ（cm）	重量（g）		内面	外面				
1	ＳＨ３	須恵器	蓋	口（12.4）・受（14.8）	〈1.9〉	―	微～２mm砂粒含む	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ハケ	灰	堅緻		200101
2	ＳＨ３	須恵器	杯身	口（11.5）・受（13.4）	3.0	―	1.5 mm白色の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻	ヘラ記号あり	200102
3	ＳＨ４	須恵器	蓋	（16.0）	2.0	―	微砂粒をわずかに含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	内面青灰　外面灰	堅緻		200103
4	ＳＨ４	須恵器	高台付杯	口（13.5）・底（9.8）	4.0	―	砂粒をわずかに含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	堅緻		200104
5	ＳＨ４	須恵器	杯	口（14.0）・底（10.8）	〈3.5〉	―	精良	回転ナデ	回転ナデ	灰白	良		200105
6	ＳＨ４	土師器	杯	（11.0）	4.0	―	1.5 mm白色の砂粒少量含む	ナデ	ナデ	橙	良		200106
7	ＳＨ４	土師器	甑	（10.0）	8.6	―	微～３mm砂粒含む	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・ハケ状工具ナデ	にぶい黄橙、黒褐、橙	良	外面黒斑あり	200107
8	ＳＨ４	土師器	甕	―	〈8.2〉	―	長石・２mm以下の砂粒含む	ナデ・工具痕	ハケ後ナデ	にぶい橙、褐灰	良		200108
9	ＳＨ５	須恵器	杯身	口（10.0）・受（12.0）	〈3.0〉	―	精良	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	灰、にぶい黄褐	堅緻		200109
10	ＳＨ５	須恵器	蓋	13.0	3.6	―	精良・白色小石含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200110
11	ＳＨ５	須恵器	長頸壺	（10.6）	〈4.0〉	―	１～４mm砂粒少量含む	ナデ	工具ナデ	灰	堅緻		200111
12	ＳＨ５	須恵器	小型椀	（10.4）	〈6.7〉	―	1 mm砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	紫灰	堅緻		200112
13	ＳＨ５	須恵器	蓋	（13.8）	3.3	―	4 mm以下の砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻	ヘラ記号あり	200113
14	ＳＨ５	土師器	杯	（9.7）	2.5	―	1 mm白色の砂粒少量含む	ナデ	ナデ	にぶい橙	良		200114
15	ＳＨ５	土師器	甕	（17.4）	〈5.8〉	―	白色砂粒を少量含む	ナデ・工具ナデ	ナデ・ハケ	灰白、にぶい黄橙	良		200115
16	ＳＨ９	須恵器	蓋	口（12.0）・底（4.3）	3.4	―	1 mm白色粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻	ヘラ記号あり	200116
17	ＳＨ13	須恵器	杯身	口（16.0）・受（16.0）	〈3.5〉	―	微～２mm砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰	堅緻		200117
18	ＳＨ21	須恵器	杯	口（13.4）・底（9.6）	3.4	―	白色砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200118
19	ＳＨ24	須恵器	杯身	口（12.8）・底（9.0）	3.0	―	砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰白	堅緻		200119
21	ＳＨ26	須恵器	杯	底（6.8）	〈3.0〉	―	2 mm白色粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200121
22	ＳＨ26	土師器	杯	（12.9）	〈3.0〉	―	白色粒少量含む	ナデ	ナデ	橙	良		200122
23	ＳＨ26	土師器	高杯	―	〈7.2〉	―	砂粒中量度含む	ナデ	ナデ	浅黄橙	良		200123
24	ＳＨ26	土師器	甕	（11.6）	〈4.8〉	―	白色粒ごく少量含む	ナデ	ナデ	橙	良		200124
25	ＳＨ26	土師器	甕	（11.4）	〈6.0〉	―	白色粒少量含む	ナデ	ナデ・ハケ	黄橙	良	外面薄いすじ状残る	200125
26	ＳＨ26	土師器	甕	（16.2）	〈3.2〉	―	白色粒少量含む	ナデ	ナデ	橙	良		200126
27	ＳＫ１	須恵器	杯	（8.0）	〈3.6〉	―	精良	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200127
28	ＳＫ１	須恵器	杯	10.0	4.0	―	精良	回転ナデ	回転ナデ	灰白、灰褐	堅緻		200128
29	ＳＫ１	須恵器	杯	口（10.0）・底（3.7）	3.9	―	砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻	ヘラ記号	200129
30	ＳＫ１	須恵器	蓋	（10.2）	3.1	―	１～２mmの砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	浅黄	良		200130
31	ＳＫ１	須恵器	杯	9.9	3.7	―	精良・底部マーブル状	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	堅緻	ヘラ記号	200131
32	ＳＫ１	須恵器	杯身	（10.2）	3.5	―	1 mm砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	堅緻		200132
33	ＳＫ１	須恵器	杯身	11.0	2.9	―	精良・白色小石ごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ	青灰	堅緻		200133
34	ＳＫ１	須恵器	蓋	口9.3・受 11.9	3.6	―	白色の砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	暗褐	堅緻	ヘラ記号	200134
35	ＳＫ１	須恵器	蓋	（10.4）	〈2.7〉	―	１～２mm砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻	外面付着物	200135
36	ＳＫ１	須恵器	蓋	（14.2）	〈2.6〉	―	白色の砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	褐灰	堅緻		200136
37	ＳＫ１	土師器	蓋	（12.5）	3.0	―	1 mm黒色の砂粒少量含む	ナデ	ナデ	橙	良		200137
38	ＳＫ１	須恵器	杯身	口9.3・受 11.5	3.6	―	白色の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰、褐灰	堅緻	ヘラ記号	200138
39	ＳＫ１	須恵器	杯身	口10.2・受 12.1・底 5.7	3.3	―	2 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	褐灰、灰	堅緻		200139
40	ＳＫ１	須恵器	杯身	口（10.4）・受（12.6）・底 6.4	3.5	―	１～４mm砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	灰	堅緻	ヘラ記号	200140
41	ＳＫ１	須恵器	杯身	口（9.2）・受（11.4）	3.3	―	4 mm以下の砂粒多く含む	ナデ	ナデ	褐灰、にぶい褐	良		200141
42	ＳＫ１	須恵器	杯身	口10.0・受 11.7	3.2	―	１～２m砂粒少量含む	ナデ	ナデ	暗青灰	堅緻		200142
43	ＳＫ１	須恵器	杯身	口11.2・受 13.0	3.2	―	１～６mm砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰、オリーブ灰	堅緻		200143
44	ＳＫ１	須恵器	杯身	口10.4・受 12.8	4.4	―	砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻	ヘラ記号	200144
45	ＳＫ１	須恵器	杯身	口（10.0）・受（12.0）・底（7.4）	2.7	―	2 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	褐灰、灰	堅緻	ヘラ記号	200145
46	ＳＫ１	須恵器	杯身	口11.9・受 13.6	4.2	―	精良	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰	堅緻		200146
47	ＳＫ１	須恵器	杯身	口（10.2）・受（12.4）	〈3.4〉	―	１～２mm砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ	灰、灰白	堅緻	ヘラ記号	200147
48	ＳＫ１	須恵器	高杯	口11.6・受 14.4・底 15.8	14.5	―	１～４mm砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200148
49	ＳＫ１	須恵器	蓋	（13.2）	2.1	―	白色の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	褐灰	堅緻		200149
50	ＳＫ１	須恵器	蓋	（15.0）	2.7	―	精良	回転ナデ	回転ナデ	灰白	良	全体摩耗	200150

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量（　）は復元 ＜　＞は残存			胎土	調整		色調	焼成	備考	登録番号
				径（cm）	高さ（cm）	重量（g）		内面	外面				
51	ＳＫ１	須恵器	蓋	（15.6）	2.3	―	3 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰	堅緻		200151
52	ＳＫ１	須恵器	蓋	（13.2）	〈1.8〉	―	1 ～ 2 mm砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200152
53	ＳＫ１	須恵器	蓋	（13.0）	〈1.5〉	―	2 mm以下の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200153
54	ＳＫ１	須恵器	蓋	（15.0）	〈2.0〉	―	3 mm以下の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200154
55	ＳＫ１	須恵器	蓋	（14.0）	〈1.5〉	―	微～ 3 mm砂粒少し含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200155
56	ＳＫ１	須恵器	蓋	（15.0）	〈1.6〉	―	3 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰、褐灰	堅緻		200156
57	ＳＫ１	須恵器	蓋	（15.8）	〈1.4〉	―	1 ～ 3 mmわずかに含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰白	良		200157
58	ＳＫ１	須恵器	蓋	（16.0）	〈0.9〉	―	1.5 mm白色粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200158
59	ＳＫ１	須恵器	蓋	（15.4）	〈1.6〉	―	1 ～ 3 mm砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰黄	良		200159
60	ＳＫ１	須恵器	蓋	（16.0）	〈1.2〉	―	1 ～ 2 mm砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200160
61	ＳＫ１	須恵器	蓋	14.5	1.2	―	砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200161
62	ＳＫ１	須恵器	蓋	（17.0）	1.6	―	1 ～ 2 mm砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・ヘラナデ	灰	堅緻		200162
63	ＳＫ１	須恵器	高杯	（24.0）	〈3.1〉	―	1 ～ 2 mm砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	浅黄	良		200163
64	ＳＫ１	土師器	杯	（13.2）	2.5	―	黒色砂粒ごく少量含む	ナデ	ナデ	橙	良		200164
65	ＳＫ１	須恵器	杯	口 13.4・底 10.0	2.7	―	2 ～ 4 mm砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り	灰白	良	全体摩耗	200165
66	ＳＫ１	土師器	杯	（16.0）	〈2.8〉	―	白色粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	橙	良		201066
67	ＳＫ１	土師器	杯	口（15.0）・底（9.5）	3.6	―	1 mm砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ・工具ナデ	にぶい橙	良		200167
68	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口 11.5・底 8.0	3.7	―	1 mm砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	堅緻		200168
69	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口（12.0）・底（9.0）	3.5	―	1 mm砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り	灰	堅緻		200169
70	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口 13.5・底 9.8	3.6	―	1.5 mm砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰	堅緻		200170
71	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口（14.0）・底（10.0）	4.2	―	精良	回転ナデ	回転ナデ	灰白	良		200171
72	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口（16.0）・底（11.6）	4.2	―	精良	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り	灰白	良		200172
73	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口（13.2）・底 9.0	3.5	―	1 ～ 2 mm砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り	灰	堅緻		200173
74	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口 13.3・底 9.7	4.1	―	3 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	堅緻		200174
75	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口 15.5・底 10.5	4.1	―	1 mm白色の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	堅緻		200175
76	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口（13.2）・底（8.6）	4.0	―	雲母・白色の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200176
77	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口（14.0）・底（10.0）	3.7	―	2 mm白色の砂粒少量含む	ナデ	ナデ	灰白	堅緻		200177
78	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口（12.6）・底（8.8）	4.0	―	白色の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200178
79	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口（15.2）・底（11.0）	4.1	―	2 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	良		200179
80	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口 18.4・底 12.7	5.3	―	3 mm以下の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	堅緻		200180
81	ＳＫ１	須恵器	高台付杯	口 18.5・底 11.9	6.3	―	2 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	良		200181
82	ＳＫ１	土師器	高台付杯	口 20.0・底 14.0	5.6	―	白色砂粒少量含む	ナデ	ナデ	橙	良		200182
83	ＳＫ１	須恵器	壺	―	〈10.0〉	―	微～ 2 mm砂粒含む	ナデ	ナデ・工具ナデ	灰、オリーブ黒	堅緻		200183
84	ＳＫ１	須恵器	壺	（13.4）	〈5.2〉	―	1 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰、褐灰	堅緻		200184
85	ＳＫ１	須恵器	長頸壺	胴 18.0・底（11.2）	〈9.5〉	―	精良	回転ナデ	回転ナデ・ヘラナデ	灰	堅緻		200185
86	ＳＫ１	須恵器	壺	（13.2）	〈7.8〉	―	白色の砂粒、黒色の砂粒多く含む	ナデ	ナデ	褐灰	堅緻	外面付着物	200186
87	ＳＫ１	土師器	甕	（14.2）	〈5.0〉	―	砂粒少ない	ナデ後指ナデ	ナデ	橙	良	口縁内面スス付着	200187
88	ＳＫ１	土師器	甕	（15.2）	〈3.6〉	―	白色粒少量含む	ナデ	ナデ	にぶい橙	良	内面黒変あり	200188
89	ＳＫ１	土師器	甕	（16.2）	〈5.3〉	―	褐色砂粒含む	ナデ	ナデ	橙	良		200189
91	ＳＫ１	土師器	甕	（24.0）	〈4.3〉	―	1 ～ 4 mm砂粒少量含む	ナデ	ナデ	橙	良		200191
92	ＳＫ１	土師器	甕	（24.6）	〈4.0〉	―	微～ 1 mm砂粒含む	ナデ	ナデ	にぶい橙	良	内面摩耗	200192
93	ＳＫ１	土師器	甕	（24.0）	〈4.5〉	―	3 mm以下の砂粒・赤褐色粒含む	ナデ	ナデ	浅黄橙	良		200193
94	ＳＫ１	土師器	甕	（20.8）	〈9.5〉	―	砂粒少ない	ナデ	ナデ	橙	良		200194
95	ＳＫ１	土師器	甕	（24.2）	〈10.9〉	―	2 mm以下の砂粒含む	工具ナデ	ハケ後ナデ	橙	良	外面スス付着	200195
96	ＳＫ１	土師器	甕	（22.0）	〈8.0〉	―	2 ～ 5 mm砂粒 10 個・微細雲母含む	工具ナデ・指ナデ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	良		200196
97	ＳＫ１	土師器	甕	（26.4）	〈5.5〉	―	2 mm以下の砂粒含む	ナデ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	良		200197
98	ＳＫ１	土師器	甕	（25.6）	〈6.5〉	―	3 mm以下の砂粒・角閃石含む	ナデ・工具ナデ	ナデ	明赤褐、橙	良	内外面とも赤化・外面スス付着	200198
99	ＳＫ１	土師器	甕	（24.8）	〈10.3〉	―	微～ 1 mm砂粒含む	ナデ・工具ナデ	ハケ後ナデ	にぶい橙	良	内面胴部摩耗・外面所々スス付着	200199
100	ＳＫ１	土師器	甕	（26.0）	〈6.2〉	―	微～ 2 mm砂粒少量、雲母含む	ナデ・工具ナデ	ナデ・ハケ	黄橙、橙	良		200200

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量（　）は復元 <　> は残存			胎土	調整		色調	焼成	備考	登録番号
				径（cm）	高さ（cm）	重量（g）		内面	外面				
101	ＳＫ１	土師器	甑把手	（把手）5.1	―	―	白色の砂粒・赤褐色粒含む	工具ナデ	指オサエ	浅黄橙、橙	良		200201
102	ＳＫ１	土師器	甑把手	（把手）4.4	―	―	雲母・白色の砂粒多く含む	工具ナデ	指ナデ・指オサエ	橙	良		200202
103	ＳＫ１	土師器	甑把手	（把手）〈5.3〉	―	―	雲母・角閃石・白色の砂粒多く含む	工具ナデ	指オサエ	橙	良		200203
104	ＳＫ１	土師器	甑	口（17.0）・底（7.5）	16.0	―	1.5 mm白色の砂粒含む	工具ナデ	タタキ後ナデ、指オサエ	橙	良	外面黒斑あり	200204
105	ＳＫ１	土師器	甕	（30.0）	〈6.8〉	―	砂粒少ない	ナデ	ナデ	橙	良	内面摩耗	200205
106	ＳＫ１	土師器	甕	（32.8）	〈9.3〉	―	白色小石ごく少量含む	ナデ	ハケ後ナデ	橙	良	外面黒変あり	200206
107	ＳＫ１	土師器	甕	（30.4）	〈20.6〉	―	3～5 mm白色粒中量含む	ナデ	ナデ	橙、黄橙	不良		200207
108	ＳＫ１	陶器	小皿	口（12.6）・底（5.8）	2.0	―	精良	ナデ	ナデ	にぶい黄	良		200208
109	ＳＫ１	土師器	小型甕	（11.2）	〈4.6〉	―	微砂粒・2～4 mm 3 個含む	ナデ	ナデ	浅黄橙、にぶい橙	良	外面口縁スス付着	200209
110	ＳＫ１	土師器	小型甕	（13.0）	〈4.3〉	―	雲母少量・白色小石少量含む	ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	内面黒変部分あり・外面摩滅	200210
111	ＳＫ１	土師器	小型甕	（14.0）	〈5.1〉	―	3～4 mm少量・微細雲母含む	ナデ	ナデ	黒褐色、にぶい黄橙	良		200211
112	ＳＫ１	土師器	甕	（14.2）	〈9.5〉	―	白色の砂粒・小石少量含む	ナデ・工具ナデ	ハケ後ナデ	にぶい橙	良		200212
113	ＳＫ１	土師器	甕	―	〈12.4〉	―	3～6 mm砂粒少量・微細雲母含む	ナデ・工具ナデ	ハケ状工具と指ナデ	浅黄橙、黄橙、褐	良	内面摩耗	200213
114	ＳＫ１	土師器	甕	（34.0）	〈8.7〉	―	雲母・1～2 mm赤褐色粒・3～5 mm白色砂粒含む	ナデ	ナデ	橙、黄橙	やや良		200214
115	ＳＫ１	土師器	甕	―	〈12.6〉	―	3 mm以下の白色砂粒多く含む・角閃石含む	ナデ	ナデ・ハケ	橙、褐	良		200215
116	ＳＫ１	土師器	甕	（15.6）	〈18.6〉	―	1～3 mm白色小石・1 mm以下赤褐色・雲母含む	ナデ・指ナデ・ハケナデ	ナデ・ハケナデ	橙、褐灰、赤褐、暗赤灰	やや良		200216
118	ＳＫ１	須恵質	権	3.5	4.2	45.0	精良	花弁状装飾		黄灰	堅緻		200218
119	ＳＫ２	須恵器	蓋	口（11.6）・受（14.0）	〈2.1〉	―	1 mm砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200219
120	ＳＫ２	須恵器	蓋	口（13.0）・受（15.0）	2.1	―	砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200220
121	ＳＫ２	須恵器	蓋	（14.8）	〈2.3〉	―	3 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	にぶい褐	良		200221
122	ＳＫ２	須恵器	高台付杯	口（13.8）・底（9.0）	3.2	―	1.5 mm白色の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200222
123	ＳＫ２	須恵器	高台付杯	口 13.9・底 9.0	4.9	―	白色粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰	堅緻		200223
124	ＳＫ２	須恵器	壺	―	〈6.2〉	―	白色の砂粒若干含む	ナデ	ナデ	灰	堅緻		200224
125	ＳＫ２	土師器	杯	10.8	3.8	―	砂粒少ない	ナデ	ナデ	橙、一部にぶい黄褐	やや良		200225
126	ＳＫ２	土師器	甕	―	〈6.2〉	―	白色小石ごく少量含む	ナデ	ナデ	浅黄橙	やや不良		200226
127	ＳＫ２	土師器	甕	（20.4）	〈6.8〉	―	白色小石微量含む	ナデ	ナデ	にぶい橙、橙	良		200227
128	ＳＫ２	土師器	甕	（13.4）	〈3.9〉	―	雲母・白色小石少量含む	工具ナデ・指ナデ	ナデ・ハケ状工具によるナデ	にぶい橙、橙	良		200228
129	ＳＫ２	土師器	小型甕	（11.6）	〈7.0〉	―	白色粒含む	ナデ	ナデ	明褐	良		200229
130	ＳＫ２	土師器	小型甕	（13.2）	〈6.2〉	―	白色粒含む	ナデ	ナデ	にぶい黄橙、橙	良	焦げ跡あり	200230
131	ＳＫ２	土師器	盤状杯	（21.0）	〈3.0〉	―	1 mm白色の砂粒少量含む	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	普通	外面丹塗り	200231
132	ＳＫ２	土師器	甑把手	（把手）5.8	―	―	雲母・白色の砂粒多く含む	工具によるナデ	指オサエ	橙	良		200232
133	ＳＫ２	土師器	甑把手	（把手）6.2	―	―	雲母・白色の砂粒含む	工具によるナデ	指オサエ	橙～褐灰	良		200233
134	ＳＫ10	土師器	杯身	（14.4）	〈3.5〉	―	少量の砂粒含む	ナデ	ナデ	浅黄橙、にぶい黄橙	良	黒斑あり	200234
135	ＳＫ11	須恵器	高台付杯	底（10.0）	〈3.4〉	―	精良	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰	堅緻		200235
136	ＳＫ14	須恵器	蓋	12.5	2.6	―	1 mm白色の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	堅緻	ヘラ記号	200236
137	ＳＫ14	須恵器	杯身	口（11.0）・受（13.1）・底（6.8）	3.1	―	2 mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	浅黄、褐灰	堅緻		200237
138	ＳＫ14	土師器	小型甕	（10.0）	〈6.4〉	―	白色粒少量含む	ナデ	ナデ・ハケ	橙	良		200238
139	ＳＫ14	土師器	甕	（14.8）	〈4.8〉	―	白色小石少量含む	ナデ	ナデ・ハケ	にぶい橙	良	内外面黒斑あり	200239
140	ＳＫ15	須恵器	杯身	11.2	2.7	―	1～3 mm砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ	紫灰	堅緻	ヘラ記号	200240
141	ＳK23	須恵器	高台付杯	底（10.8）	〈2.8〉	―	白色の砂粒若干含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200241
142	ＳＫ17	須恵器	蓋	（13.0）	2.7	―	精良・砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻	ヘラ記号	200242
143	ＳＫ18	須恵器	杯身	口 11.6・受 13.4	3.1	―	精良・白色粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	堅緻	ヘラ記号	200243
144	ＳＫ20	須恵器	杯身	口(8.8)・受（11.1）・底（4.6）	2.3	―	白色の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200244
145	ＳＫ20	須恵器	高台付杯	口（10.6）・底（6.0）	3.5	―	精良	回転ナデ	回転ナデ	灰	良		200245
146	ＳＫ20	須恵器	蓋	14.9	2.0	―	1～5 mm白色粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200246
147	ＳＫ20	須恵器	蓋	（15.8）	1.5	―	精良	回転ナデ	回転ナデ	灰	良	全体摩耗	200247
148	ＳＫ20	須恵器	皿	口（18.4）・底（14.4）	2.3	―	1 mm以下の白色の石多く含む	回転ナデ	回転ナデ	黄灰、ぶい橙	堅緻		200248
149	ＳＫ20	須恵器	小壺	―	〈4.0〉	―	微～1 mm大砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ	青灰	堅緻		200249
150	ＳＫ20	土師器	甕	（27.0）	〈5.4〉	―	雲母・白色の小砂粒含む	ナデ・ハケ状工具によるナデ	ナデ・ハケ状工具によるナデ	褐灰、にぶい黄橙、灰黄褐	やや良		200250

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量（　）は復元 <　> は残存			胎土	調整		色調	焼成	備考	登録番号
				径（cm）	高さ（cm）	重量（g）		内面	外面				
151	ＳＫ 29	須恵器	蓋	（16.0）	〈2.5〉	―	微～ 4 mm砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200251
152	ＳＫ 32	須恵器	蓋	口（7.0）・受（8.9）	1.7	―	精良	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200252
153	ＳＫ 32	須恵器	蓋	（11.4）	〈1.2〉	―	微～ 1 mm砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200253
154	ＳＫ 32	須恵器	蓋	（15.2）	1.2	―	精良	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200254
155	ＳＫ 32	土師器	椀	17.4	5.6	―	2 mm以下の砂粒含む	ナデ	ナデ・ケズリ	橙	良		200255
156	ＳＫ 32	土師器	壺	（7.6）	〈7.0〉	―	雲母・白色の砂粒、赤褐色砂粒含む	ナデ	ナデ・工具ナデ	橙、一部灰褐	やや良		200256
157	ＳＫ 34	須恵器	蓋	（16.0）	〈1.5〉	―	白色の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200257
158	ＳＫ 34	須恵器	高台付杯	（11.0）	3.4	―	黒色・白色砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	良		200258
159	ＳＫ 34	須恵器	高台付杯	口（12.5）・底（9.2）	3.4	―	2 mm白色粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰白	堅緻		200259
160	ＳＫ 34	須恵器	杯蓋	（13.0）	3.1	―	1 mm灰色砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰黄	堅緻		200260
161	ＳＫ 34	須恵器	壺	（14.6）	〈5.5〉	―	白色の砂粒含む	ナデ	ナデ・タタキ後ナデ	灰	堅緻	外面自然釉あり	200261
162	ＳＫ 34	須恵器	長頸壺	底（9.6）	〈10.4〉	―	2 mm白色の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	灰	堅緻		200262
163	Ｐ 544	須恵器	蓋	口（9.2）・受（11.1）	2.2	―	白色の砂粒多く含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200263
164	Ｐ 602	須恵器	蓋	口8.7・受 10.6	3.3	―	精良・白色小石ごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰、褐灰	堅緻		200264
165	Ｐ 161	須恵器	蓋	口（11.0）・受（13.2）	〈3.0〉	―	1 mm白色の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200265
166	Ｐ 352	須恵器	蓋	（14.0）	〈1.5〉	―	1 mm白色の砂粒少量含む	回転ナデ	回転ナデ	灰	堅緻		200266
167	溝	須恵器	蓋	（20.0）	〈1.7〉	―	精良・白色小石ごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	灰	堅緻		200267
168	表採	須恵器	壺	（20.0）	〈4.2〉	―	白色粒少量含む	ナデ	ナデ	灰白	堅緻		200268
169	表採	須恵器	壺	（21.8）	〈6.7〉	―	白色粒少量含む	回転ナデ・青海波文	タタキ、ナデ	オリーブ黒～灰	堅緻		200269
170	Ｐ 551	土師器	甕	（17.4）	〈5.0〉	―	1.5 mm白色砂粒少量含む	ナデ	ナデ	橙	普通		200270
171	表採	土師器	甕	（28.0）	〈6.0〉	―	1 mm白色砂粒多く含む	ナデ	ナデ・ハケ	暗灰	良		200271

表２　門戸口遺跡出土石器・鉄器観察表

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量（　）復元、<　> 残存			製作技法		備考	登録番号
				径 / 長さ（cm）	高さ / 厚み（cm）	重量（g）	内面	外面		
20	ＳＫ 1	石器	紡錘車	4.0	1.0	31.0	研磨	研磨	蛇紋岩	200120
117	ＳＡ 22	石器	紡錘車	4.5	1.6	59.0	研磨	研磨	滑石	200217
172	ＳＫ 1	鉄器	鉄鏃	<5.9>	0.9	9.0	―	―		200272
173	ＳＫ 1	鉄器	釣針状鉄器	6.4	0.6	10.0	―	―		200273
174	ＳＫ 1	鉄器	刀子	<8.8>	(0.4)	17.0	―	―		200274
175	ＳＫ 1	鉄器	鉄玉	1.15	1.1	2.0	―	―		200275
176	ＳＫ 1	鉄器	不明鉄器	<5.7>	0.75	9.0	―	―		200276
177	ＳＫ 1	鉄器	鉄滓	6.0	2.5	120.0	―	―		200277
178	ＳＫ 1	鉄器	鉄滓	3.2	1.7	18.0	―	―		200278
179	ＳＫ 1	鉄器	鉄滓	2.8	1.7	20.0	―	―		200279
180	ＳＫ 7	鉄器	鉄鏃	4.0	1.3	11.0	―	―		200280
181	ＳＫ 20	鉄器	槍鉋？	<8.7>	(0.8)	14.0	―	―		200281
182	Ｓ H28	鉄器	鉄滓	6.0	1.9	67.0	―	―		200282
183	Ｓ H28	鉄器	鉄滓	8.4	3.3	196.0	―	―		200283
184	Ｓ H28	鉄器	鉄滓	3.0	2.05	16.0	―	―		200284
185	Ｓ H28	鉄器	鉄滓	2.15	1.6	7.0	―	―		200285
186	P445	鉄器	留金具？	4.2	0.2 ～ 0.25	8.0	―	―		200286

第Ⅳ章　まとめ

１．土製権について

ＳＫ１から出土した土製品についてであるが、法量は高さ 4.2cm、底面径 3.5cm、重量は 45 ｇを測り、形状の特徴は円錐台に紐通し用の孔を穿孔した鈕がつく。鈕には紐通し孔が開く方向に紐が掛かる溝が入るが使用痕跡は明瞭ではない。体部の側面は花弁状に彫られていて非常に装飾性が高いものである。体部端は底面付近には底面端に並行する一条溝が入り、別の部位として意識している。底面には同心円状の線刻を二重に施し、中央にある小円形の窪みの中心から放射状に直線がのびる。調査時は、仏教関連遺物の可能性も考えたが、輪内遼氏による権の認定基準（2016 輪内）に基づき、権としての条件を備えていることから土製権として報告する。権とは重量を量る秤のおもりである。秤には天秤と棹秤があるが、棹秤は横木に吊るしたおもりの移動により重さを量るものであるため、紐通し孔を持つ本遺跡出土権状製品は棹秤のおもりとして認識している。権には金属製･土製･石製があり、本調査区で出土したものは土製（土師質・須恵質・瓦質含む）である。古代における権は、銅製が原器で壺形と花弁半球形の２種類あり、この基本形は変化しない。それぞれ鈕があり、鉄製のものも含め７世紀～ 10 世紀の間共通してみられる特徴である。石および土製のものは金属製の模倣を意識して製作されているが、９世紀～ 10 世紀にかけて形態のバリエーションは減り､鈕が省略され単純化することが明らかになっている。そこには度量衡が「政策的」波及から「私的レベル」に浸透するという規制変化が背景にあるとされている（2012 菅原）。

時期に関しては、共伴する出土遺物から６世紀後半～７世紀初めと７世紀末～８世紀後半の可能性がある。先行研究において権状製品の分類と時期について示されている（1995 吉村・2012 菅原）のでまずは鳥栖市内で出土している権状製品と併せて概観してみたい。鳥栖市内で「権」として認識して報告しているものは牛原前田遺跡と本原遺跡の２例があり、いずれも石製品である。牛原前田遺跡古墳時代から奈良時代の集落遺跡で、養父郡衙との関連も想定されている。報告されている「石製分銅」は６世紀～７世紀の住居から出土していて形状は作り出しによる明確な鈕を持たない裁頭四角錘状で横断面形は台形である。ただし、共伴遺物が少なく、少量の須恵器から時期判断をしているため時期は６世紀～７世紀とされているが、形状から時期は下る可能性があるため再検討が必要である。本原遺跡も古墳時代～奈良時代の集落遺跡で、姫社郷の中心地とされる。報告されている「分銅形石製品」は古代～平安時代の包含層から出土しているため時期ははっきりしない。牛原前田遺跡と同様の形状であるが、側面上位に鈕を意識した薄い段が付く。牛原前田遺跡例が権導入期のものでなければ、２例とも形状や遺跡の性格から、権導入後（８世紀代）の石製権と考えられる。そして、本遺跡出土権状製品は土製で、市内出土権と材質と形状が異なる。側面の装飾は金属権の花弁状半球形にある稜を模倣したものと考えられ、下部も原器にみられる台座もしくは下部の稜を意識した造りといえる。原器を模した土製品で古いものは７世紀末のものがあるが、形状は鈕＋円柱台であるが側面の装飾は見られず、また、金属権の模倣を意識して製作されはじめるのは８世前後であることがわかっている（2012 菅原）。地方への度量衡の普及状況を考えても金属権を模倣した土製権が６世紀末～７世紀代初めの集落にもたらされる可能性は低いといえる。鈕＋円柱台の体部のものは７世紀末から８世紀末までみられるが、それ以降は全体的に形態が単純化し鈕が省略された石製のものが一般化する。加えて、鳥栖市内出土の石製権の時期が８世紀代のものである可能性が高いことや、本遺跡出土の土製権の形状及び重量が 45 ｇで古代の重量（24 銖＝大１両（約 42 ｇ））と近いことから、ＳＫ１出土の８世紀代の須恵器と同時期のものとしておきたい。

２．刻書紡錘車について

ＳＨ 22 の埋土中から刻書紡錘車が出土しており、形状は薄台形、重さは 59ｇを測り、文字は左側に反

時計回りに入る。「大伴目」とあることから大伴氏を示す刻書である。建物から出土した遺物が少ないため時期判断ができないが、周辺の遺構から７世紀末～８世紀末までの遺物が出土していることと刻書紡錘車が九州に持ち込まれた背景に防人の派遣が考えられることから上限は７世紀末とすることができる。下限については防人が一旦廃止される天平２（730）年以前に求められるが、天平神護２（766）年に筑紫に残る防人がいることが中央で問題になっていて、神埼郡に設けられた空閑地の周辺にも防人が残留しているようである。これらの残留防人によって刻まれた可能性もあるため 766 年から「大伴」の刻書から大伴氏から伴氏に改姓する 823 年の間とすることもできる。なお「大伴」は姓であろうが、「目」については「さかん」であるのか「目」という名前なのかははっきりしない。

刻書紡錘車出土地のほとんどを占める関東の例をみると刻書内容は人物や地名が多く、紡織作業に関わる祭祀・信仰・儀礼に使用するもので、その際に執り行った人物名を刻書する場合が多いと指摘されている（高橋 2008）。形状は薄台形で重さ 40 ～ 70ｇに収まるものが多く、その大半は 50ｇ以上である。時期は７世紀末～９世紀にかけてみられ８世紀後半～９世紀にかけてが多数を占める。本遺跡出土紡錘車も形状、重さとも関東出土例と類似しており、時期的にも７世紀後半から９世紀前半に収まることからも関東例との共通点は多い。

九州出土の刻書紡錘車の例をみると、小城市丁永遺跡と長崎県大村市竹松遺跡の出土例の２点がある。いずれも製作時期の上限は７世紀終盤のものである。丁永遺跡出土石錘には「丁亥年」とあり、干支表記がされる大宝律令施行以前の 687 年に当てはまるもので、関東でみられるものと同様に紡績作業に関わる祭祀・信仰・儀礼で使用される可能性が高いとしている（2010 小城市教育委員会）。竹松遺跡の出土石錘には「木都」とある。７世紀終盤のものとしているが、こちらは製作時期（刻書時期）の下限に関して８世紀以降である見解もある。用途としては行政上の機能をもつ「城」と水陸交通の結節点を示す「水津」との関連に着目し、祭祀遺物としての要素だけではなく郡衙施設を示すものでもあり、それらを有する群家としての求心性、都市性を示すものとしている（2017 長崎県教育委員会）。本遺跡出土刻書紡錘車は人物名のみの刻書であるが、形状や刻書内容からも関東例を倣って上記２例と同様、祭祀遺物の要素を持つ遺物として捉えることができる。その場合、祭祀を執り行った人物＝「大伴目」であるが、本遺跡で他に祭祀を裏付けるものは確認できない。また、その希少性から紡績作業に関わる祭祀・儀礼に使用されるものとして他に流通せず、その文化は養父地域では根付かなかったようである。いずれにしても、刻書紡錘車の搬入もしくは紡錘車に刻書する行為が本地域に伝えられた背景にその文化を持つ東国からの一時的な移入、主に防人の配置が関わっていたことが窺える資料である。

３．門戸口遺跡の性格

門戸口遺跡では竪穴建物 15 軒、掘立柱建物跡６棟、土坑 16 基を確認している。竪穴建物とその周辺に配置する掘立柱建物とで構成される集落遺跡であるが、時期を判断する上で重要な出土遺物の多くがＳＫ１から出土しているため個別の建物の時期を判断するのが難しい状況であった。以下では各施設ごとに調査の状況を踏まえ本遺跡の性格を検討していきたい。

竪穴建物から出土した須恵器および土器の多くは６世紀後半～７世紀初めのもので、土器類が出土した建物は古墳時時代後期と判断している。SH ４から８世紀代の須恵器が出土しているが、ＳＨ４から出土したものは、埋土中から出土したものが多く、30cm 程度の表土直下で床面を検出していること、周囲に攪乱が多くみられることから流れ込みとした。また、建物の配置についてみると、竈跡が確認できる竪穴建物がＳＨ３・４・33 の３軒ある。そのうち北西向きに竈を持つものがＳＨ４と 33、西向きに持つものがＳＨ３と、西方向を意識した配置である。竈の配置状況をもとに他の竪穴建物の主軸をみると、東西方向に主軸をもつものとやや西にふれる南北方向に主軸をもつグループがみられる。主軸のずれを時期差

とするか判断できないが、建物同士の重複が少ないことから建物の存続時期は限定的なものといえる。そして、竪穴建物ともに集落を構成する掘立柱建物の主軸は南北方向であり、竪穴建物とは重複しながらも掘立柱建物同士の重複は少ないこと、柱穴の大きさや埋土、掘り方などから、これらをすべて同時期の建物として判断している。遺物の出土量が少量であるため建物の時期判断については推測の域を出ないが、主軸がずれる竪穴建物の時期とは異なる可能性がある。

また、土坑については、本調査区で遺物の出土量が一番多い遺構であるＳＫ１からは古墳時代の遺物と８世紀中頃～後半を中心とした須恵器等が多数出土しており、他の土坑では少量ではあるが７世紀末～８世紀前半の須恵器も出土している。これらと同時期の遺物は本調査区内の建物跡からはほとんど確認できていないことから、その出自が問題となる。ＳＫ１に限定してみると、出土遺物の多くは同一層から出土しており埋没の際に時期差は認められず、古墳時代の遺物と奈良時代の遺物が同じタイミングで廃棄されていて８世後半以降の遺物は確認していない。このことは８世紀後半の段階で本調査区周辺の土地利用が変化し、その中で７世紀末～８世紀後半の建物に伴う遺物の廃棄から埋没までが一連でなされたことを示している。また、古墳に埋葬される須恵器類も出土していることから、周辺の土地改変に伴い古墳を壊した際に出土した副葬品も８世紀後半段階でＳＫ１へ一緒に廃棄しているようである。その後も現代に至るまで土地改変に伴い掘立柱建物を除いた遺構は削平されたと考えられるため、調査で確認している竪穴建物とは別に７世紀末～８世紀後半の遺物に伴う遺構が存在していた可能性は高い。

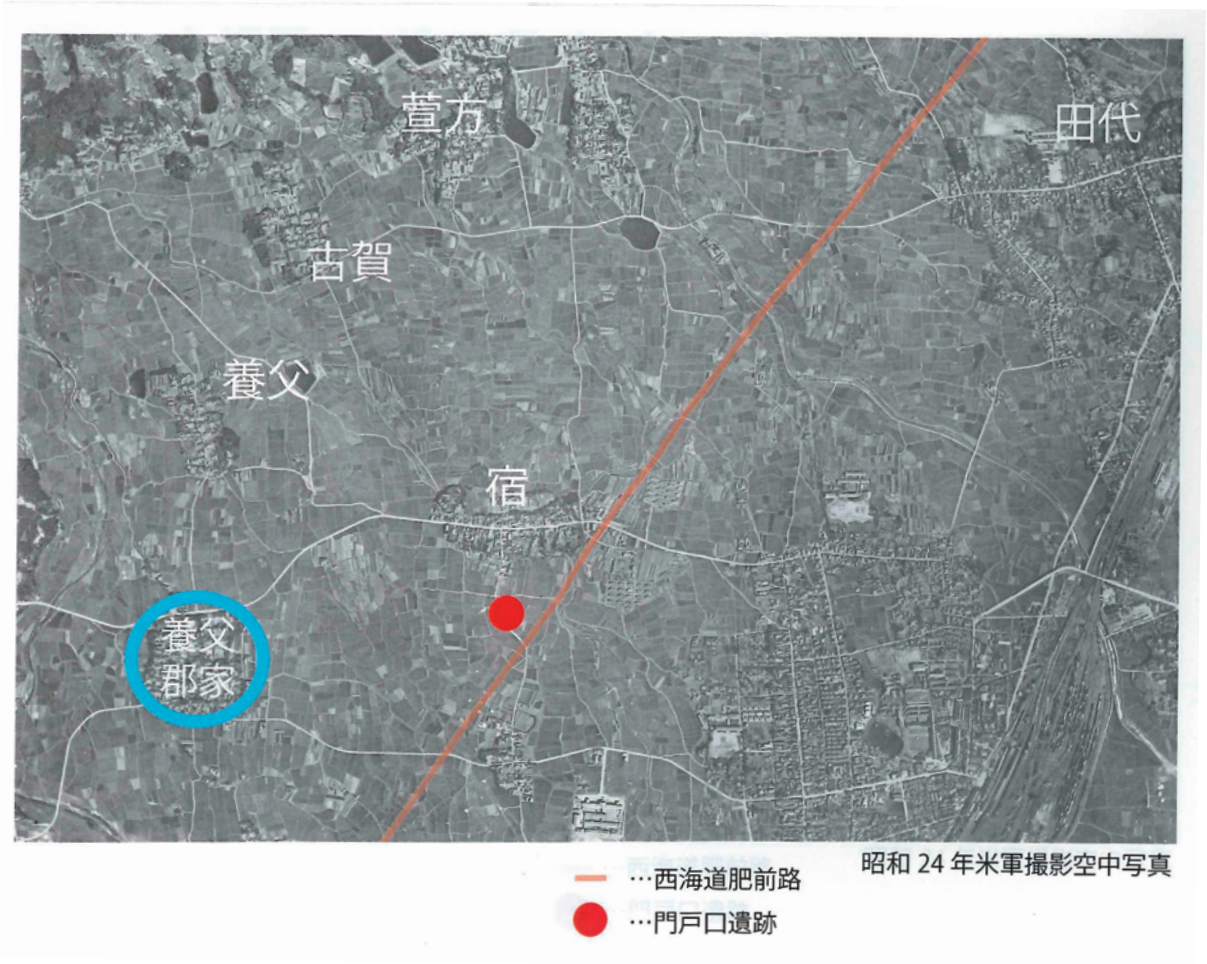
周辺の８世紀代の集落遺構としては養父群家に比定される蔵上遺跡で確認された８世紀代の２間×２間の総柱掘立柱建物群とそれとセットになる竪穴建物がある。集落は８世紀前半から中頃を中心に一部８世紀後半まで存続しているとされ、本遺跡で確認した遺物の時期よりやや古いことから蔵上遺跡の集落域は東へ移動したようである。本遺跡に７世紀末～８世紀後半の建物群が存在していた可能性が高く、郡衙に関連する遺物である権や刻書紡錘車の存在から古墳時代後期の竪穴建物と時期が異なる可能性のある建物群は雑役に従事する人物が居住する集落の一部、もしくは群家関連の施設群と捉えることができる。

土製権および刻書紡錘車の観察については、九州歴史資料館　吉村靖徳氏・酒井芳司氏、小城市教育委員会　太田正和氏に行っていただき多くの助言をいただきました。また、嬉野市教育委員会輪内遼氏には権についてご教授いただきました。記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

1988　鳥栖市教育委員会『本原遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第 36 集
1996　吉村靖徳　「権衡に関する一考察―福岡県内出土権状製品の検討と課題―」『研究論集』20　九州歴史資料館
1996　鳥栖市教育委員会『牛原前田遺跡Ⅱ』鳥栖市文化財調査報告書第 48 集
2000　鳥栖市教育委員会『蔵上遺跡Ⅰ』蔵上土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書（２）　鳥栖市文化財調査報告書第 59 集
2000　鳥栖市教育委員会『蔵上遺跡Ⅱ』蔵上土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書（３）　鳥栖市文化財調査報告書第 60 集
2003　望月精司　「古代権状錘に関する一考察―北陸出土権衡資料の検討を中心として―」『北陸古代土器研究』第 10 号
　　北陸古代土器研究会
2005　鳥栖市教育委員会　『鳥栖市誌』第２巻　原始・古代編
2008　高橋英之「文字が書かれた紡錘車―群馬県内出土資料を中心にー」第 32 回企画展『紡む』紡錘車が語る多胡郡
　　吉井町多胡記念碑館
2010　小城市教育委員会『北小路遺跡一・二区　丁永遺跡一・二・四・五区』小城市文化財調査報告書　第九集
2012　菅原祥夫　「石のおもりと土のおもりー古代権衡の地方普及をめぐって―」『福島県埋蔵文化財センター白河館研究紀要』23-32
　　福島県文化振興団福島文化財センター白河館
2016　輪内遼「弥生時代の権衡―九州の新出資料を中心に―」『古文化談叢』第 76 集　九州古文化研究会
2016　輪内遼「古墳時代の権―比恵遺跡出土品の再評価―」『七隈史学』18　七隈史学会
2017　長崎県教育委員会　『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所報告書　第５集

市役所周辺俯瞰（南から）



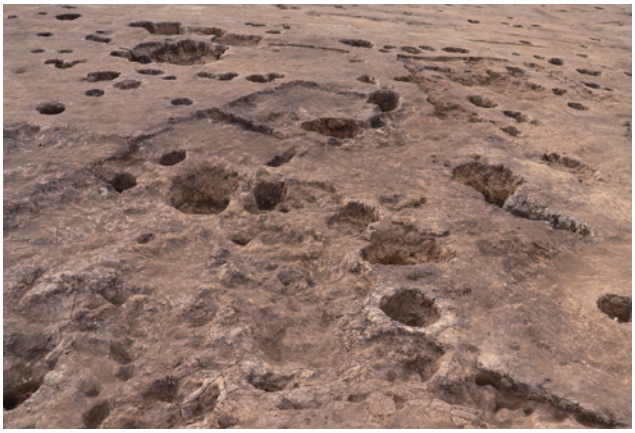
昭和 24 年米軍撮影空中写真

図版２

門戸口遺跡遠景（東から）

ＳＫ１出土土製品

ＳＨ３（東から）



ＳＨ４完掘（北東から）

ＳＨ５完掘（西から）

ＳＨ９完掘（南東から）

ＳＨ 21 完掘（南西から）

ＳＨ 22 完掘（北東から）

ＳＨ 24 完掘（南西から）

ＳＨ 25（南西から）

図版 4

ＳＨ 26 完掘（南東から）

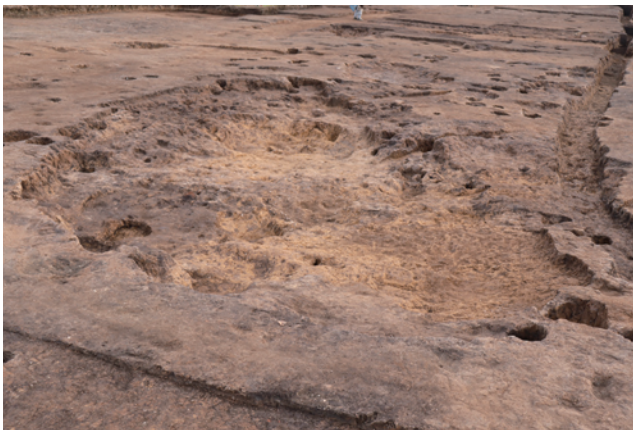
ＳＨ 27 完掘（南西から）

ＳＨ 28 完掘（南東から）

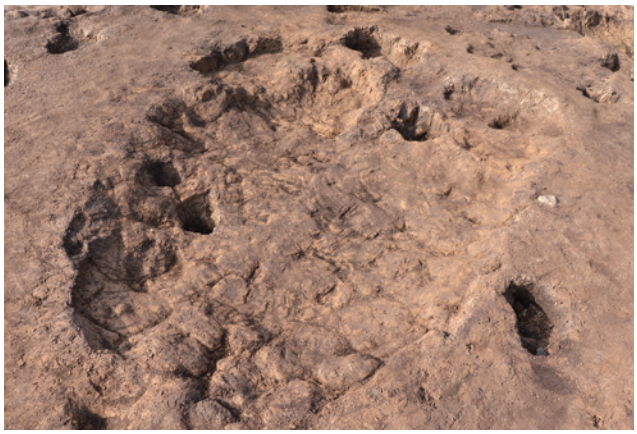
ＳＨ 33 完掘（北東から）

ＳＫ１土器出状況（西から）

ＳＫ１土製品出状況（南から）



ＳＫ１完掘（北から）



ＳＫ２完掘（南東から）

ＳＫ６完掘（東から）

ＳＫ７完掘（西から）

ＳＫ 10 完掘（南西から）

ＳＫ 11 完掘（西から）

ＳＫ 14 完掘（北から）

ＳＫ 15 完掘（北西から）

ＳＫ 16 完掘（南から）

ＳＫ 17 完掘（南西から）

ＳＫ 18 完掘（南西から）

ＳＫ 19 完掘（北西から）

ＳＫ 20 完掘（南西から）

ＳＫ 23 完掘（北東から）

ＳＫ 29 完掘（北西から）

ＳＫ 30 完掘（南東から）

ＳＫ 34 完掘（北東から）

ＳＢ 35 完掘（北東から）

ＳＢ 36 完掘（北から）

ＳＢ 37・38 完掘（南東から）

ＳＢ 39 完掘（南東から）

ＳＢ 40 完掘（北東から）

1

2

3

4

5

6

7

8

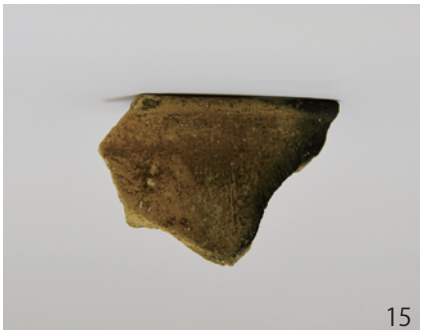
10

図版 8

11

12

13


15

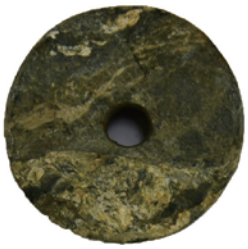
16

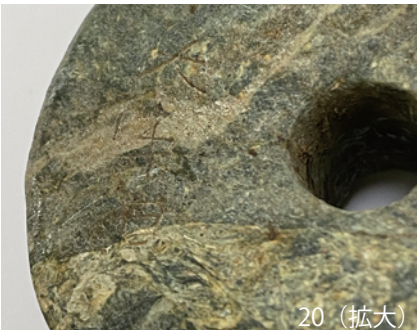
16（裏）

17

19

22


20


20（拡大）

23

24

27

28

29

30

32

31

31（裏）

33

34

34（上）

35

36

37

39

38

38（裏）

41

図版 10

40

40（裏）

42

43

44

43（裏）

45

45（裏）

46

47

47（裏）

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

65

66

67

図版 12

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

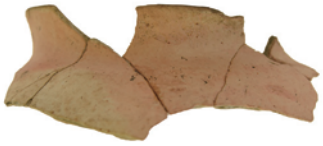
83

84

85

86

87


89

91

92

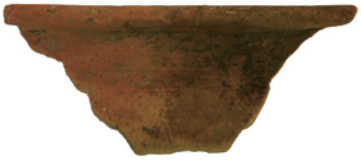
93

94

95

96

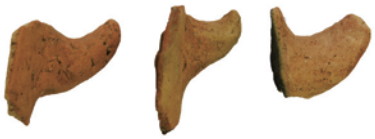
97


98

99

図版 14

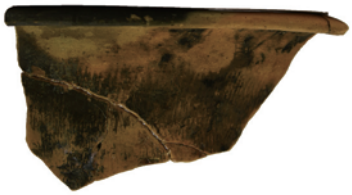
100



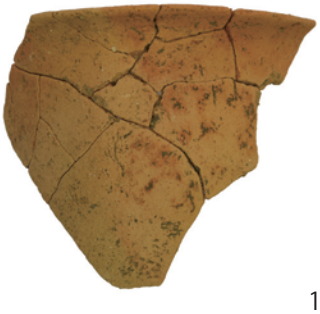
101・102・103

104

105



106



107

108

109

110

111

112

113

115

116

117

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

133・132

134

図版 16

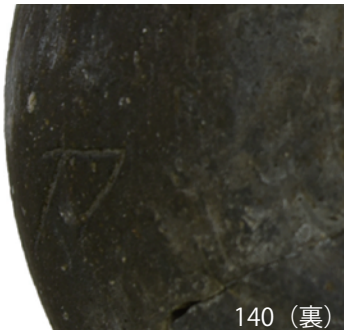
135

137

138

139

140


140（裏）

141

143

143（裏）

144

145

146

147

148

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

166

図版 18

167

168

169

170

171

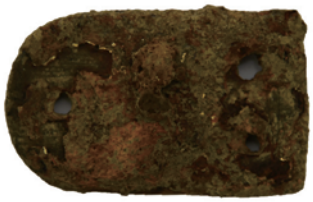
172・173

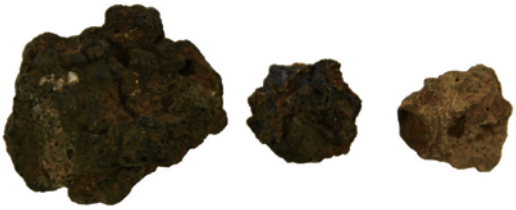
174

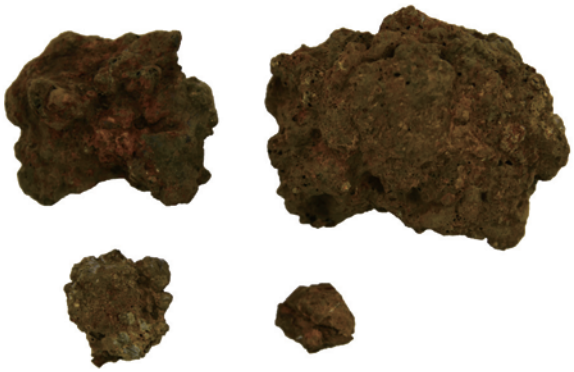
176

180

181


186


177・178・179


182・183・184・185

報　告　書　抄　録

ふりがな	もんとぐちいせき
書名	門戸口遺跡
副書名	市庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鳥栖市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 96 集
編著者名	岡田晴菜
編集機関	鳥栖市教育委員会
所在地	〒 841-8511　　佐賀県鳥栖市宿町 1118 番地　　TEL　0942（85）3695
発行年月日	西暦　2021 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もんとぐちいせき 門戸口遺跡	さがけんとすし 佐賀県鳥栖市 しゅくまち　ばんち 宿町 1118 番地	410213	0175	33° 22′ 39″	130° 30° 18″	20191008 ～ 20200228	2,500㎡	市庁舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
門戸口遺跡	古墳 古代	古墳 古代	小穴、土坑 住居跡、掘立柱建物跡、土坑、小穴	須恵器 土師器 鉄器	刻書紡錘車・土製権状製品が出土

鳥栖市文化財報告書　第 96 集

門戸口遺跡

令和 3 年 3 月 31 日　発行

発行　鳥栖市教育委員会
佐賀県鳥栖市宿町 1118 番地

印刷　松雪印刷所
佐賀県鳥栖市 3 丁目 1503